川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年十月一日發行第五卷第十號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百八十一号

十月號

No.281

秋燈放談

麻生路郎

颱風と人間

女中が無意識に捨てる盥の水も蟻の世界にとつては予測しない山津浪であり、高潮である。人間は常に小さな知識をふりまわして得々としているが、盥の水に横死する蟻を笑えないとしたら、自然に対してモツと謙譲でなければならない。

戰敗して色を失う。インフレでドギモを抜かれる。金詰りで首を吊る。税金で青いき吐いき。颱風でペシヤンコだ。

台風のあんな力が欲しくなりこれは私の近作である。政治家よ、学者よ、宗教家よ、教育者よ、社会事業家よ、平和論者よ、一ペン顔を見せてくれ。君達は年中何をつぶやいているのだ。

颱風が屋根瓦を木の葉のように吹き散らした。くさつていた瓦商の眼がギラ〳〵と光つたことであろう。家屋がバタ〳〵倒壞した。息を引きとりかけていた建築屋が、グツとちろりを傾けたであろう。失業人夫は血色をとりもどしたことであろう。二日も三日も前に判つている颱風をどうすることも出來ないと云うことは、おかしくツておかしくツてと笑いたくなる。

あの颱風を薄めて使えば石炭なしに船が走るのにと思うと、モツと神経の太い学者や政治家が一人や二人いてもいいのではあるまいか。嘘横町の笑話に、天候の予報に、雨或は晴、処によつて小雨があると云うのがあつたそうだが、これなら当るであろう。今度のキジヤ颱風の予報の巾のひろかつたのに吃驚した人たちは、斯うした笑話がノドにつまる思いがするのである。

ジエーン颱風に一パイ食わされた大阪では、キジヤ颱風が同じコースをとつて來襲すると云う予報に、南側え、板をパン〳〵打ちつけて、サア來いとばかりに待ちうけたが、次の予報で、西へ廻つて若狭湾え來ると云う。ソレでは北風だと、北側を見るとナンの防備もない始末。これでは笑うより外に手がなかろうではないか。

ところが若狭湾えはお越しにならず、九州を北上して玄海灘を抜け、韓國の南岸を洗つて姿を消してしまつた。大阪ではヤレ〳〵助つたと思う半面に、待ち構えていたお客さんが來ずに、ビールも料理も無駄になつてしまつた形だつた。

ジエーン颱風の翌日などはけろりと晴れていた。夜になると四ツ辻に將棋盤や碁盤を出して、パチリ〳〵とやつている。今度は颱風の方が呆ツ氣にとられたことであろう。

人間と自由

その昔、朝日新聞の皇室記事を読んでいると、十行に十七字位「御」の字が用いられていたものだ。私の長い筆の生活で、随分いろんなものを書いて來たが皇室記事ばかりはイヤだつた。あんなに「御」の字を沢山使はなければならないのでは、幾ら報道記事にしたところで面白くもないものが出來上るにきまつてると思うと、それだけでも筆が鈍つてしまう。

しかし、私が皇室に関する記事を書くのに氣がすゝまなかつたもう一つの理由は、自由を奪はれた天皇のお姿が眼に浮んで來て、実に氣の毒な人だと同情？　をしていたからであつた。

李王殿下あたりでもお写眞を撮らしていただく段になると、一寸待つて下さいと云つて、俄に直立不動と云つたような、きまりきつたポーズ以外に撮影をすることが出來なかつたのである。

われ〳〵のように、浴衣がけや頬杖を突いたナチュラルな写眞などを撮らせることは思いもよらなかつたのである。

斯うした形式的なものに、十重二十重に縛ばられて暮らしていられたのである。一等自由であるべき一國の皇帝こそ実に一番縛ばられた生活をされていたのである。

敗戰のみことのりに一線をひいて天皇の自由は拡大した。お写眞にしても、皇太子殿下と一諸に新聞をのぞき込んだお姿を撮影されているのを拜見した時などは、自分のことのように、のび〳〵とした氣持になれたのを覚ている。それにしても、まだ〳〵一挙に断ち切れない幾多の束縛のあることは想像に難くないのである。

しかし、これは日本の皇族だけでなく、英國の皇帝にしても、そうであることは「文藝春秋」の十月号に、シンプソン夫人で問題になつたウインザア公の手記が載つているのを読まれた方ならうなづける筈だ。

自由と云うものは全く曲者だ。首相などにも自由なんて云うものはないと断定してもいゝだろう。

少々の物質の贅沢することが如何に自由を縛ばるか、しかも自ら求めて縛られている人のなんと多いことよと思うと、身内の寒くなるのを覚える。

貧しきものは幸なりと云う聖句をこんなところに使つていゝかどうか知らないが、物質的な慾望を思はないところに自由は招かずとも來るような氣がする。

競輪と府・市民

競輪が問題になつている。競輪が面白いスポーツである

ことには間違いはない。府や市が、緑地帯え、廣々とした競輪場を造つて、府民や市民に自由に競輪をさせるのだつたら、焼打や殺人などは決して起らないであろう。

ところが、車券を賣り、射倖心を唆ることによつて、テラ銭稼ぎをやつたので問題が惹起したのである。

府や市では、やめたいが、やめられぬと云つている。テラ銭の味が忘れられぬのである。やめたいと云う以上、悪いことは百も承知しているのである。やめられぬと云うのは外に財源がないからと云う口実に過ぎない。この筆法でいけば泥棒はやめたいが、社会に出ても人があいてにしてくれぬので、矢ッ張りやめられぬ。淫賣は悪るいと知つていますが、外にこれだけの收入のある仕事がないからやめられぬと云う口実も立ちそうである。

某市長の如きは「競輪はうるさい問題を起すのでこりこりだ予算も組んであることだし、廃止するわけにいかぬ。いやな嫁だがよく仕事をしてくれるので帰すわけにはいかぬといつた実情です」と云つているが、おかしな例を持つて來たものだ。斯うなると市長の常識が疑はしくなる。

金さえ這入ればバクチを公然とやらしてもいゝ。悪るいと知つても予算に組んであるからやめるわけにはいかぬとは滑稽を通り越したお説である。

その同じ役所に、教育に携つている人たちがあるが、この人たちは、先づお膝元の教育からして欲しいものである。教育の方でも、テラ銭の幾分を頂戴しているので、自分等の手では押える訳にいかぬと云うのであれば、サッサと辞職して貰いたい。

一体、役人は口を開けば予算々々と云うが、予算などと云うものは、どうにでもなるものである。貧乏人がピアノを購求すると云う予算をたてるから、間違つた財源に頼らなければならぬのである。

小さな市が大きな市と同一施設をやろうとするから無理な財源、無理な予算が生れるのだ。

月並な云い草だが、敗戰國が起ち上るには、堅実な財源と、堅実な予算の外に、手はない筈だ。

個人の生活を脅やかし、家庭悲劇を続出させて、稼いだテラ銭で何んの教育ぞと云いたい。どんな子どもでも、母親に淫賣までさせて、大学を卒業したくはないであろう。

悪るいと知つたら、一時も早く廃めることである。既設の施設は他に利用法もあろう。いゝ智慧が出なければ、サッサと辞職して貰いたい。でなければ府民の府、市民の市とはならない。

放送の是非

放談ついでに放送についても一言したい。放送は第一に聽覚に訴えるものであることに極限して貰いたい。

水泳や野球のようなものは、單に、番組や、日時や、場所を報じ、試合当日の夜に於て、勝敗を簡單に報ずる程度でよいと思う。打ちましたく式は、その道の人にとつては面白いには違いないが、働く人の時間を奪うこと、これより甚しいものはなかろう。私の知人の宅では、「妹までが、お針の手をやめてしまうので、球を一つ拔いといたろうかと思うてまんね」と云うている。水泳についても同じことが云える。

人氣があるかちとか、大衆の欲求だとか、いろんな理窟はつくであろうが、ソレだつたら、今に、ストリップショーなども、脱ぎました〳〵、只今お尻あたりまで下げて來ましたなんてやるであろうし、競輪の八百長騒ぎから、焼打ちの実況放送まで、手にとるように放送しないとも限らないであろう。そんな莫迦げたことをと、一笑に附する勇氣があるなら、常に根本問題を忘れない放送をやつて貰いたい。上野の森の変な放送をして放送局の常識を疑はれるようなことを、もう一度繰返えさないことが賢明である。

放送ならではと思うものの随一は、音樂であり、尋ね人などは、放送以外に求め得ないであろう。

常識的な学術方面ものもいいし、氣象の放送もいゝ。内外のニュースなどは云うまでもなかろう。

十月号・目次

表紙……柴谷宰二郎
秋燈放談……廉生路郎…(二)
選者のこと……吉田水車…(一六)
民衆文學としての川柳……飯降白香…(八)
俳句から川柳へ……安川久留美…(一六)
詠史川柳「につぽん」(2)……戸田古方…(八、七)
川柳と心理……静岡忠八…(一七)
徒然草と古川柳(上)……富士野鞍馬…(一〇)
碁と將棋と川柳……山本葉光…(一七)
都信……福田山雨楼…(一一)
古川柳と歌舞伎を彩る女(二)……水谷竹莊…(一三)
静かなる境地……河楊梵鐘…(一六)
森東魚略年譜……福田山雨楼編…(一八)
箕面吟行……烏ケ辻川柳会…(一八)
不朽洞句帖……廉生路郎…(一九)
近作柳樽……廉生路郎選…(二二)
川柳塔……廉生路郎選…(一四)
各地柳壇……廉生路郎選…(二〇)
課題吟「ビール」……菊沢小松園選…(一九)
動静…(二四)　不朽洞会から…(二一)
編輯室にて……(二四)

寺詣り炎暑へ母の軽るい足　　堺市　中島生々庵

坐ふとんへ扇さぬ母の膝の嵩
母と往く心斉橋の片日照り　　大阪市　武部香林

いとはんと申されぬほど勇ましゝ
老夫婦パンで済ましておきまひよか
暇な人猫に礼儀を教えたり
生きんとす酒の力も少し借り　　大阪市　浪玲之介

討死のように家族の寢乱れる
間の抜けた大阪弁に儲けられ　　平塚市　木村孤浪

白河は秋風どこかこの暑さ
すげ笠が半分かくす赤だすき
すかしては注ぎすかしては注ぐ一人旅
いつの間にか東北弁に汽車はなり
隣りから詩想みだして話しかけ
夕焼に染めて白樺われに媚び
アベックの隣り雑誌ははかどらず　　横浜市　福田山雨楼

慾のない方だと妻に云われたり
ガムを噛む銀座で慾のない女
引越して元の浜松町の空
悪いことおよそせぬのに盗まれる　　東京都　前山北海

酔ざめも置いてお客の床を敷き
GIの眼に木炭車ワンダーフル
期日ずれ責むればとがる印刷屋　　布哇　内藤草一郎

連れ達つて匂ひと歩るく樂しさよ
親の業継がず白服白い靴
嫁が來てからは味噌汁影を消し
拜ませる丈けよとドレス仕らせる　　尼崎市　水谷鮎美

「きけ、わだつみの声」を聽る
階級がちがひ教師もなぐられる
激雨しきり墓標にしがみつく自爆　　兵庫縣　大坂形水

一日で眼が落ち込んだ暑さなり
まゝごとに似てお供への物作る
墓詣りばあちやん明治の着物着て
大阪をもう諦めて役場に出　　大阪市　福田妄夢

へたくそなギターが止まぬ暑さなり
どこ読むか知らぬが"LIFE"持つて出る
とげられぬ想ひのうみを見せて死に　　大阪府　西尾栞

蠅叩きもつて商賣実に暇
夫婦喧嘩長男にフランと笑はれる
姑発駅美人の横は座し難し
医者の椰揄を損ねる程に親は訊き

湯の郷にて
見送りのどつちもおぢぎたんとする　　大牟田市　高田抱逸

継母の仕打を墓に訴へる
スト休をこつそり好きな阿蘇にする
ハンストは遠目に妻子寄せつけず
公職を受けて帰れば内輪揉め　　大阪市　市場沒食子

避姙薬頼むに足らぬ腹となり
雨衝いて高中小と通学し
ビール飲み〳〵百万円の融資受け
夫婦とも保守勞働が苦にならず
扇風機の代りを妻がまだつとめ　　名古屋市　吉田水車

路傍先生句碑建設記念
名も知れぬ山ふところに句碑光る
大写しあはれ名刀はげて居り　　大阪市　須崎豆秋

ヤイ〳〵と言ふな造幣局ちやなし
庸司君を悼む（二句）
君思ふ夜の流星かしきりなり
川柳は宗教なりと言ひ残し
食ちや寢食ちや寢猫も暑いです
地蔵盆漫画のやうに月が出た　　神戸市　竹内湖花

据膳へあんた妻子を捨てる氣か
落ちて來る花火の下の貸ボート
長屋悲しや姉も妹も嫁かず産む　　兵庫縣　北川春巣

家を出た日の朝刊がある靴
銀行に娘がいて株を聞きかじり
宿替に昔の煙草卷器出る
通勤は須磨も明石も読みふけり　　奈良縣　尾崎方正

ランデブー頼りないのがよいと云ふ
落雷で不通ビールのターミナル
喰入る様にバンドを締めて夏を出る
七人を生んだと母は悪びれず　　岡山縣　鈴木丸坡

就職へ沈默癖がまた祟り
宴会へ女房の電話またかゝり
高利貸こんな小さな家にすみ
心配をさせた二人がもう別れ
近眼が星の話へ乘つて來ず

僕の顔を見すに返事はしてくれる　岡山縣　大森風來子
肉体が要るのでせうと淋しすぎ
スコツプを持つ履歴書となりにけり
一儲けしたこと二号だけに言い　大阪市　木下幽王
ちとお遊びに來られて困る世辞を云ひ
百ヶ日此頃お経も詠げてます
子の無い淋しさ家が美し過ぎて　鳥取市　中島鉄洲
生を得て二十年戦時消耗品なりし
ハイヤーがバスを埃に入れて逃げ　大阪市　新川博也
鏡見て疲れた顔がなほ疲れ
行く先も云はず彼女の投キツス
日傭の群シュク〳〵と朝を行く　大阪市　水谷竹莊
誘惑に負けた心をみすかされ
俗曲に明治の頃をなつかしみ　兵庫縣　小沢史葉
自治会の座長にライバル選ばれる
潑剌と夏にいどんだワンピース
争議解決労資ともん〳〵ビアホール　兵庫縣　小西無鬼
頬紅はピエロに似たり処女とゆう
人事課がチョークを持てば眼が光り　大阪市　吉田斜水
呑み足らぬ証拠依然として無口
極端に口説きあつさり見捨てられ　大阪市　岡田紫雲
子とあなどつて英語でかるくあしらはれ
家政婦にこうして居れぬ恋もあり　奈良縣　白牛奇朗
西瓜切る手が迷うてる子沢山
万引の心氣澄ます化粧室　岡山縣　山分淑郎
知つているのに聞き直す嬉しい瞳
水草は流れる事におそれない
天分と決めて拾ひ屋あせらない
くど〳〵と何を言はうとしているか　高知市　月原寿明
金の無い話ばつかりして別れ
めし時はめしにしてゐる痴話喧嘩
ストリツプショーの哀れな汗をみる
裁判所すぐ六法で返事する
苦労ない人の團扇のうしろ差し　大阪市　富岡淡舟
あの頃はと言ふは落目の暮し也
子沢山父につく子と母の子と
子が出來て夫の靴を磨かない　奈良縣　飯降白香
白痴美といふ恰好のグビ人草
食パンは同じガードの下で買ひ　奈良縣　西辻竹青
梅雨空へまた借傘でつかれたり
汽車よけたついでに工夫畫にする　呉市　林野甦光
夕涼み西瓜の色を見て帰り
スナツプへ揃つた足を意識して　大阪市　竹田芦穂
電報の判に轉寢跨がれる
乱れ籠の嵩も嬉しいハネムーン
子の事を判事が訊いてシンとする　大阪市　上田春柳
育ちゆく今日も茶碗を一つわり
臨月へ吾が家の皿はかけたまゝ　大阪市　太田良子
夫婦やろかと不躾な目をなげる
見送りに來たのにあつさり行つちまひ　尼崎市　靜岡忠八
飲んで來た顔が議長を困らせる
道連れと飲まねばならぬはめになり
もてなしの意味がわからぬまゝで飲み　大阪市　松江梅里
花火にも似てたよりない好きなひと
眼は田中口は笠置に似た美人
言ひそびれとう〳〵滝に來てしまひ　養老滝にて
いつそひと思ひとは思へど滝のおと　岡山縣　直原七面山
飲みますわ女今宵を許す氣の
酔ふた日の足は女へ向きたがり
捨てられる様に急かれて嫁いだ娘
逃げ口を何時も彼女は用意して
一言も言はずに二人出來てゐる　岡山縣　黒田笑泉
淋しくはないかと一升提げてくる
案外に話せば分る未亡人　宇部市　上林粗影
病人が出てから氷値を知られ
算盤に乗る鎖夏法を考へる
熱海の火事にマツチ隠しとこ　大阪市　西森花村
鳴り止んだ目覚し今日の義務は済み
あの顔が俺かと床屋で目をつむり
地下資場園藝部迄男逃げ
三年目お琴は邪魔な物にされ
絹漉しの感触秋はもう近し　鳥取市　河村日満子
飲代を稼ぐ頑張りつゞくなり
挨拶へ顔をそむけた氣の強さ

未亡人女中代りの口があり
蔭口の第一人者默しとり　兵庫縣　家沢齊花

百姓の良さ還暦の共稼
大阪へ濠皮むきにやりました
魚釣のねばり何かを教えられ
停電の長さに負けて寢てしまい　滋賀縣　黄瀬美秋

郵便屋お礼を言はず汗で來る
お好きなやうにと責任もたしとき
大言荘語税務署でかしこまり
こそばゆいラヂオへ姑寢てしまい　岡山市　藤本滿年

上役の留守へ煙草が余計いり
だしぬけに味はいかゞと妻の声
別荘の風呂は白帆を見てはいり
大量の事務をさばいて月を踏む　笠置シヅ子渡米

あの顔でわてほんまにようわんワ　熊本縣　西口如川

後悔は呑めない様に言つちまい
銀河など褒めて初恋言ひ寄れず　岡山縣　福島鉄兒

それからの暮し察しの通りです
万引をする眼させぬ眼からみ合ひ
職たのむ土産家計費から裂かれ
信頼の出來ぬ時計で終電車
卷上げるつもりのキッスとは知らず
娘たち安い儲けの稼に出　岡山縣　直原湖月

女子競輪スタート切ればおしりだけ
信じたり疑つたりの恋心　岡山縣　黒田久米女

氣を配りくばつてまゝ子愛されず

二号から見れば馬鹿げた共稼ぎ　岡山市　藤本茶々

デパートで結局おかずだけを買い
結婚を悲愴な顔でうなずく娘
暑いので叱る調子もはずれてる　京都市　谷内一草

京なまりすだれをそつと分けて出る
水平線雲の高さが威嚇する　大阪市　福本翩骨

油絵の醜婦が生きてゐる夜中
雞が水のむように酒を飲み　池田市　太田木声

草深い家に名刺を貼つて住み
梅雨晴に妻の糊桶持たされる
年下の夫に見せる髮を結ひ　兵庫縣　榎南夏六

一周忌子と父だけの夕涼み
ネクタイの疲れを妻は見て臭れず　大阪市　伊藤迷宮

我が道を往けと恩師は餞ける
絵封筒宵待草の唄が好き
サングラス中途半端な恋ばかり
海山の恩を忘れたアロハシャツ
失敗とは言はず店内整理中　兵庫縣　小畠無聖

口説きたい口説かれたいが月をほめ
合掌はアブレグールの知らぬ味
高架線皿のトマトも蚊帳もみえ　岡山縣　高山朗笑

月見草恋の囁き聞きあきる
堕る身をやつとさゝえる子が生れ　岡山縣　杉山一貫

親同志のうそは子供がばらし合ひ
兄弟の喧嘩兄嫁おろおろし

自殺未遂病院へ來て甘え　岡山縣　家本富至

踊ろうが呑もうが九尺に寢てる牛
甘党の夫へ何か物足らず　岡山縣　横部牛歩

買う方で見れば痩せてる豚であり
同好の士へエロ本が配られる　岡山縣　服部十九平

新墓が白く淋しく暮残り
テーブルへ足投げ上げて記者倶樂部
尾行刑事交通巡査に遮られ　西宮市　田辺由布

割切れぬ姿酒藏そびえ立ち
ストリップショウ蒸し暑い都会の灯　大分縣　桑原表情

旅に病む

治療費に触れず病狀ねむごろに
内助の功妻はみとりに來て眠り
若先生と呼ぶ態勢は既になり
父病めば一人見合にゆく度胸
医師名簿うれし三代名を連らね　大阪市　山中志乃布

薄情にせられ余計に忘れ兼ね
子に電車見せつゝ待つは好きな人
畳寢する夫婦は向をわざとかへ　松山市　前田伍健

怒らせて勝つ手もあつてヘボ將棋
肯定も否定もせずに美女笑ひ
虚子帰松子規の光りは七光り　大阪市　橋本綠雨

慰めてくれる文でも時はすぎ
いろ〳〵の涙で暮らすこと多し

詠史川柳

につぽん（二）

戸田古方

古代社會

（一）農　耕

世界經濟史の定石である牧畜時代は日本にはなかつた、あまり早く大陸から新らしい進んだ農耕の様式が日本につたわり、燒畑式をすてゝ本格的なものにかわつたためである。紀元一世紀頃、登呂の遺跡その時代のものである。

植え方と氣すかず種をかえてみる

豐年に富士鳴動がおさまらずつき合えば隣の村の人のよさ

（二）鋤　鍬

金屬器の傳來もその頃である。終器という以外に使い道のわからない銅鐸が作られた。日本神話の古さもこのあたり以前にさかのぼり得ない。

銅鐸が寒々ならぶ考古室

銅の鉾なげしにかけてある社務所

（三）タブー

禁忌である、神を生活のすべてにむすびつけていた古代人は治安のため神の罰のあたることは可成大きな役割をはたしていた。

ボスにする奴があるからボスになり

しめ縄ブツリ凶兆を信じ

神の名のつかいどころもなれてくる

寒中の今日のみそぎのようこたえ

（四）余剰生產

喰べてチヨンという時代には進歩も何も考えられない。米作りは困難な仕事だが少しづつ余裕をあたえ、國のあゆみがこのへんからはじまる。分業、交換とともに酋長も出來る。

酋長のまじない病氣なおつて來

大漁の鯛ばつかり喰べさゝれ

酋長の智慧で堤が出來上り

（五）貴族と奴隸

余剰生產から生れた世話人は段々富裕になつて、貴族の様相を帶びはじめる。土地は開拓すればいくらでも、只勞働力が問題になつて御多分にもれず奴隸經濟時代になる。

ピンはねることの興味もおぼえだし

神さまのお告げというて取立てる

いろり端奴隸の座るとこも決め

（六）倭人傳

古事記日本書紀は八世紀に皇權擁護のために書かれたもの、史としての資格にかけている。だから新につぽん史はよりどころを中國文獻に求める。一世紀の前漢書、三世紀の三國志魏志倭人傳がそれである。大和朝廷だといわれる耶馬台國のことや、神功皇后に擬せられる卑彌呼のことが出ている。尙漢倭奴國王金印や貨泉という当時の貨幣が出土して文獻の確実さを裏書している。

巫女卑彌呼巫術の腕はつたわらず

動かせぬ証拠というが堀り出され

通訳の四声少々くせがあり

島國根性にもふれる倭人傳

（七）火　合　せ

前漢書より倭人傳と日本の統一が物語られている。その形式は戰斗的よりむしろ平和的に、生活の中心であるかまどの火を一つにすることで行われたらしい。

日輪とむすびついてるかまどの火

一つになれば一つに燃ゆる火なれども

火合せに聖なる処女がえらばれる

（八）大　仙　陵

大和國家統一後の皇權の伸長は驚くべき强大さをもつていた。その象徵が大阪府堺市にある仁德天皇陵――大仙陵で世界一の規模をもつている。副葬品、埴輪の問題も出てくる。

土埋び奴隸は蟻の如く這い

簡單に死んだ奴隸を片づける

素樸さが買われ客間に置く埴輪

（九）好太王碑

三九一年日本が大陸に出兵したことが近頃の教科書の年表のトップである。確実な日本史のはじめ、鴨綠江の上流洞溝というところに高句麗廣開土王（好太王）の碑がありその出兵にふれている。

聆つたことだけ書いた碑がのこり

目錄に捧げられたる奴婢の数

生國の新羅というが案内し

（十）妻　問　ひ

村も出來ない前の人の生活を群と呼んでいる、その頃は族内婚といつて近親婚が行われていたが、經驗から親子や兄妹婚はタブーであつた。やがて族外婚をする様になつたが、すべて妻と夫は同權に近い狀態であつた。

婚殿のお入りあかあかつけて待ち

歌垣に東の方がしらみかけ

合鍵の一つを夫もつており

アマテラス信じられてる母系族

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から說き起して敎むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好參考書である。敢て一読を薦む。

好評喝々

B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送費　金十二円

取次御注文は　大阪市住吉郡万代西五丁目一五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

民衆文学としての川柳

飯降白香

私は新しい文学は一般大衆と関連なしに生れるものでもなければ、又大衆の納得なしに存在するものでもないとおもふ。羽仁五郎著の「明治維新」の中に川柳を数十句ズラリと並べた一頁がある。そしてその川柳に僅かな説明が加へられているに過ぎないが、維新の原動力としての人民大衆の声がそれによつて伺はれ、又その叫こそ実に正しい表現であることがかゝれている。この意味に於てこの列挙された数十句の川柳は、内容的に見て実に重要であり、それが文学的形式をとつた作品であるが故に、私たちはこれに大いに関心をもたざるを得ない。今迄の文学史家は川柳をうがち、おかしみを楽天的に表現したもの、又時には自嘲的に表現した町人文学だと定義づけているが、どの見地から町人文学として川柳を見るのか又同時代の他のジャンルとの連関はどうであるか、又町人文化の中のどういふ位置に川柳はおかれるべきであるか、といふ風な事については全然語られていない。今日勤労大衆の文学としての川柳が、その昔から大衆へのこされた一つの文化遺産としての所以を私は種々の立場から考察してみたい。

一、川柳は町人文学といへるか

町人文学とはどんなものかといふことを説明するには、まづ町人といふものがどういうものであるかを定義づける必要がある。町人といふ階級が歴史上にあらはれたのは大体中世時代である。中世とは源頼朝が平氏を追討して鎌倉の地に幕府を建てた西紀一一八五年から徳川幕府の滅亡西紀一八六八年迄大体封建制度が行はれ、それが確立した時代をさすのである。しかし人によつては文禄を中心として更に近世といふ風にわける人もあるが、この時代は何といつても武士階級があらゆる点に於て優先的な立場におかれすべてに支配指導層として君臨していたのであるが、承久の乱に引つゞいておこつた蒙古の来寇に武士階級は非常な窮乏に陥り、このために高利貸即ち商業資本の性格をもつ庶民階級に先祖傳来の土地を手放すやうな事がおこつてきたのである。これがそもそも町人といふものの起源になるのである。

それが封建制度が次第に発達し確立していくにつれて都市即ち城下町が発生し、そこを基盤として町人階級の勢力が益々伸張してきて遂に十五六世紀には、酒屋、土倉（質屋）納屋（倉庫業）とよばれる専門の高利貸が出現して、町人階級は経済方面に揺がぬ力をもつに至つたのである。更にこの町人の勢力に農民層からあらはれた名主階級――これは或時には農民の指導者となりて土一揆をおこしたり、徳政令に反抗したり、或時は高利貸を発達伸張させた基盤となつたり、或時は武士大名を夢みてそれたらんとつとめたりなど、実に社会的に微妙な動きをなした――が陰に陽にこの町人階級に影響をなして町人といふ独特の性格をつくりあげたのである。この独特の町人という性格をもつた階級によつてつくられた文学が町人文学と称せられるもので例へば、近松門左エ門の浄瑠璃とか井原西鶴の小説にみられるものである。これらの文学の内容をなす中心思想は経済面に於ける人間的社会的葛藤を描きその葛藤の中で泣き、笑ひ、苦しみ、悩み、悲しみ、嘆き、憎みあふ人間の姿、あるがままの赤裸々の人間感情が描写され、特に義理と人情を中心としてそれにからみつく経済面が中心に描写されているのである。町人の世界に於ては金が絶対であり、この金を限りなく求めゆかうとするその物慾のすごさ、それに義理と人情がからみつき、そこに本当のリアリスチックな人間の姿をわれわれは見るのである。

現代の世相と比較しても、人間の世相の眞実のすがたはいつも不変であることがみられ、この眞実の姿に町人の性格が伺はれ延いてはその姿は現代大衆の姿に通ずるものである。このリアリズム、これこそ現代の川柳の本質であらねばならない。柳樽に

役人の子はにぎ〳〵をよく覚え
座頭の場みそ役人を云ひまかし
町人で役所をうめる大晦日
まひなひをきゆせん筋でつかむなり

これらの句に描写されているのは收賄堕落の一般的支配層の現狀であり、現代に於ても伺はれる世相であり、経済的には町人こそ支配者であるぞと表示したものであり、現実の中からその眞実を発見してその核心をついたものとみるべきで、大晦日には役所（奉行所）などがかけとり商人で一杯になつた狀態や、盲座頭の金貸しに役人がとつめられたりする当時の世相を描写したものでこの事実といふか現実も動かすことの出来ぬ世相

血圧降下に
アークレミン
山之内
注射剤
血管アウトホルモンとアミン複剤
山之内製薬

で、こゝに不変の人間の姿、不滅の現実を見るのである。この句のもち味を〝皮肉〟とか〝うがち〟とか〝滑稽〟といふ風に我々は鑑賞するかもしれないが、もう一歩更に深くこれらの句を考察したときにこゝに一般大衆のよりよき政治への希求の反映と見る、ことは出來ないであらうか、移りゆく現実の相を洞察する力をもつ町人は経済的にはあくなき慾求をもちながらも常に大衆の利益幸福を求めてやまぬ健全な世界観をもつて、平明に明朗にズバリと核心をついて自分たちの苦悩を表現しているところ、かくの如き短詩型でもつてせめてもの政治改革を願つているところ、こゝにこそ大衆と共にある文学といふ感を深めざるを得ないのである。この意味に於て、私は川柳こそ町人がうみ出した文学であり、大衆の納得のいく存在であり、大衆と共に成長発展してゆく文学であらねばならないとおもふものである。

現実の中にあつて將來の発展の希望をすてず、健全な考へ方、明瞭平明な表現をもつ文学、生活の中からうまれ、現実の生活の中から希望を見出して、そして理想を追求してやまぬ健康な文学、私は川柳こそこの意味を充分具備した短詩型の文学だと断言してはばからないのである。

二、川柳は以上の見地より町人文学として定義づけられたわけであるが、然らば同時代の他のジャンルとの関連又町人文化の中での位置について一考してみたい。

新規出版禁止令
きついものよ四百余州に本がなし

川沼意知殺害事件
有難さ人を殺すと殺される
臨終に村中よつて米をつき
つれていの艫では行かぬ大晦日
彌陀しやかの違ひ不縁の元となり
心中はほめてやるのがたむけなり

不朽洞句帖

麻生路郎

秋と共に死亡通知を掌にうける
颱風のあんな力が欲しくなり
全壊と少し誇張もして寄越し
君止せよ風見舞にまで商賣氣
颱風の中で正信偈がきこえ
颱風をけろり忘れて逢いに行く
瓦の飛んだ話いつまで続くのか
人くさい中で煙草を喫うばかり
いつ行つても洗濯してる女にて
老らくの恋の濃度のてれくさく

妙薬をあければ中は小判なり
吉原は町人風情いはぬとこ
大名の過去は野にふし山にふし
下に下にで田舎者かしこまり
百人の中にめかし一人いつ
百姓はねこだの上で死にたがり
これ小判たつた一晩いてくれろ
小ざむらい女郎の中でベッをかき
ひどいこと質屋を出ると無腰なり
姑嫁をみると土芥の如し
借金の穴へ娘をうめるなり

これらの句は日常生活の一寸したおかしみ、矛盾を描写したものではあるが、その描写は短詩型の表現とはいひながら当時の洒落本や人情本の描写と比較してみたとき、單に人情世態をうつしたといふだけではなくて、その底に根づよい人間性が又批判された現実が伺はれるのである。

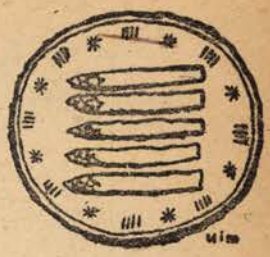
人情本も洒落本もたしかに現実をうつしたものに相違はないが、川柳には現実を自分の社会、自分の時代として視即ち生きた現実、批判された現実として、これを視、健全な同情と愛とを以て、実際生活に即した眞理をつかんで更に將來へまでのよりよき発展を願ふ理想のもとに、表現され描写されているのであるから本当の意味に於けるヒューマニズムの表現といはざるを得ないのである。

この意味に於て、洒落本や人情本などより文学的價値を高く評價したい。近松の浮瑠璃は個人といふものが描写されていない。当時の世態の現実は描写されていても個人の性情というものが描かれず、それよりも義理とか人情と言ふ普遍的の観念や個人の運命よりも善人さかえ、悪人亡ぶと言う社会的な因果律がこの描写の焦点となつていて、社会の前には個人の價値全然なく、社会全体の秩序のためには個人の幸、不幸は論ずるにたらぬといふヒューマニズムを沒却したもので、随つて人に対する批評でも、社会との交渉を生ずる外面の行爲のみを断片的に見て、この行爲の内面に於ける心理的道程を察せず、又一貫せる人格の発現として、それを考へやうともせず、善悪正邪といふ單純な概念で容易に批判を下すのとはたしかに川柳は趣がちがふのである。

前にあげた例句の「心中はほめてやるのがたむけなり」などはたしかに川柳ならではの感をふかくするもので、そこにこそ本当に個人を生かす人間愛のにじみでているわけで大衆文学としての川柳の意義も又こゝにあるのである。

又西鶴の小説を例にとつてみるが、近松と比較して西鶴の方が人間としての普遍性即ち本能を焦点としてそれに鋭い眼をむけている点はたしかに人生の根本問題にふれたところがあつて、やゝ川柳に近い感がするが、それとても單に本能の描写に止るのみで彼の小説にはより健全な社会建設といふ理想の上に立つた人生描写でないだけに、そして、又唯物主義黄金万能、肉慾中心で人間の行動を規範している点は、やはり本当の眞実の相を描写したものとはいひ難いのである。

これらの点より考へて町人文学の中に於ける川柳の位置は、実に高いものであらねば



徒然草と古川柳〔上〕

冨士野鞍馬

「徒然草」とは、その序段に

「つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかいて、心うつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」

と書き出しの文句からつけられた書名で、元徳二年（一三三〇年）から、建武三年（一三三七年）の間に、当時の和歌四天王の一人、吉田兼好（姓は卜部）が書いた随筆集二巻である。そして兼好は天平五年（一三五〇年）に六十八才でなくなつている。

この随筆集の内容は、見聞感想、故実、評論、佛教観等を、非凡な慧眼と犀利な筆致で書かれ

「長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそ目やすかるべけれ」とか

「妻といふものこそ男の持つまじきものなれ」

等と奇抜な理想を書いている。後に「兼好法師集」というのがあるそうだが未見である。

京傳は「金々先生造花夢」に

「吉田の兼好もみづから蓆を織りて世渡りせしなり」

と書いているが、これは洒落本だからどうかと思われる。

兼好は御宇多天皇の寵をうけ、崩御の後薙髪して、当時頓阿、淨弁、慶運と共に和歌四天王といわれていた。

兼好の入るは風雅な四天王　タル二七

京都仁和寺の南、妙心寺の西にあたる双ケ岡に隠棲して、この徒然草を書いたので

兼好は世になき草を世に残し　タル七八

兼好の名はつれ〳〵の草に萠え　タル一二一

見る度にあかぬ双ケ岡の草
花も実もあるは双ケ岡の草
名高い草は双ケ岡に生え

等々と賞讃されて、江戸時代も相当に愛読されたので、これを取材にした古川柳も多く見られるのである。

そのうちでもつとも多く目につくのは仁和寺の鼎踊の滑稽で、ちと長くなるけれどこの章を摘録してみると

「五十三段――これも仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとて、おのおの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり傍なる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限なし、しばしかなでて後、ぬかむとするに、大方ぬかれず、酒宴ことさめて、いかがはせむとまどいけり。とかくすれば頸のまはりかけて、血垂り、ただ膨れに膨れみちて、息もつまりければ、うち破らむとすれど、たやすく破れず、響きて堪へ難かりければ、かなはですべきやうなくて、三足なる角の上に、かたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる医師の加りゐて行きけるに、道すがら人の怪み見ること限なし、医師のもとにさし入りて対ひゐたりけむありさま、さこそ異様なりけめ。ものをいふもくぐもり声に響きて聞えず「かかる事は書にも見えず傳えたる教もなし」といへば、又仁和寺へ帰りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りゐて泣き悲めども、聞くらむとも覚えず。かゝるほどに、ある者のいふやう「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生ならない。然るに今まであまりその價値を高く評價されなかつたのは、それが短詩型の表現であつたといふことも一つの遠因ではあらうが、私は柄井川柳以後の川柳家の堕落にその原因を見出すのである。

種の葱も人も額づく御神恩
清濁を隔てず護る神の慈悲
身にあまる風にひれふす川柳
和かく固くもちなし人心

といふ風な実に川柳の本質から川柳の生命からいへば話にならぬ堕落陳腐な句で、このやうな句が川柳と称して幕末前後百年ほどの間流行して世をなびかせていたのである。これらは生活している大衆の声でもなければ当時の世相の眞実描写でもないのである。かゝる句が横行している間、川柳は文学の世界から轉落して、その價値を失つてしまつたのであつた。所が明治の中葉頃から川柳のルネッサンスがおこりその先頭として麻生路郎師が雄々しく改革を叫ばれ更に近代精神の基盤にたつて固性味をもつた新しい生活の文学、知性をもつた大衆の健全な誤樂の一つとして平俗明朗を尊んで、その昔の意義ある川柳たらんと一生をこの道にさゝげられて努力されている川柳界に私は大きな期待をかけているのである。町人文学のもつ平明さと明朗さと健全さに更に個性味と知性味を加味しそしてその時代を流れる歴史の中心にふれた生き生きとした眞実の姿を描写する作品をのせられる「川柳雑誌」の存在を私は高く買つているのである。その昔の町人文学としての川柳の意義を現代の勤労大衆の文学としての川柳たらしめるべく、よき師、麻生路郎氏のもと不朽洞会員の方々の努力精進を望むと共に、その発展を期待してやまないのである。

麻生路郎師の句碑建設の記念として一言祝意と感想を述べたのである。

（此の稿は麻生路郎師句碑建設記念会に於いて講演されたもの）

長谷川成一先生著
人間の分類と世態
特價三〇円　〒六円
著者は世俗を超越して眞に人間的に生きてゐる人。川柳では一徹と称し「君などは惡貨の一人流行るべし」と金儲けにキユウ〳〵たる医師仲間を調殺する人、その奇骨、その柳眼が凝つて、戦鞴を余所にこの快著となつたもの。一読を薦む。
發行所　大阪市住吉區帝代西五丁目二五番地　不朽洞
振替口座　大阪　三〇三九二

きざらむ。ただ力を立てゝ引給へ」と葛しべをまはりにさし入れて、かれを隔てて、頸もちぎるるばかりに引きたるに、耳鼻欠けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。」

というので、次のような句が詠まれている。

仁和寺の茶番鼎でぶつこわし　タル三六

つれ〳〵のちやり場に鼎舞を書き　四〇

仁和寺へ鰤物師も來る外科も來る　四一

道成寺ほどの鼎のさわぎ也　五二

仁和寺は鼎手桶は淺草寺　五八

仁和寺の茶ばん狂言味噌をつけ　七二

仁和寺の張札かぶり物無用　八八

兼好も鼎に笑ひ〳〵書き　一二五

仁和寺の酒興に外科よいかけ師よ　一六〇

仁和寺の初手は見立の福祿壽　一六五

仁和寺の納所山師を叱りつけ　一六六

仁和寺の蹴ぎ水でもかけてみろ　一六七

又鰹をけなして次のように書いている

「百十九段――鎌倉の海に鰹魚といふ魚は、かの境にはさらなきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは「この魚、おのれら若かりし世まではばかしき人の前に出づること侍らざりき、頭は下部も食はず、切りて棄て侍りしものなり」と申しき。かやうのものも世の末になれば上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。」

とあるに対し、江戸つ子は力

都信

福田山雨楼

東京で生れ、東京で育つた所謂江戸ッ子は、老幼男女おしなべて、「ひ」を「し」と發音する。「日比谷」をしびや、「人」をし、「飛行機」をしこうきと自然に口に出るから妙だ。さる物知り曰く。それは江戸の大火で「火」をおそれるの余り「ひ」を口にせず、「し」と云うならわしが自然できたからだと。だから「し」を「ひ」とは無論いわない。「ひ」と云う言葉が禁句なのである。

こぶを入れて反抗的の句を作つている。

兼好は毒だというが呑めるやつ　タル三〇

兼好が何といつても飲めるやつ　四四

兼好と伊勢屋がほめる初松魚　七一

初松魚値を兼好にきかせたし　一〇五

兼好と伊勢屋は馬鹿だなアかか　一四一

初松魚なに兼好が知るものか　一四四

「白うるり一」という奇妙な言葉が六十段にある。これはでたらめの言葉で、本文を適錄すると

「六十段――この僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と人の問ひければ「さるものをわれも知らず。もしあらましかば、この僧の顏に似てむ」とぞいひける」

でつまり出鱈目のあだ名であつた。この僧都というのは御室眞乘院の盛親僧都のことで

勾当の心で笑ふ白うるり　武十一

「勾当」は眞言宗の執事であるから盛親僧都にあたる。その後これを衒学的に詠んでいる。

白うるりやはり瓜だとへぼ學者　タル九七

表裏空言歌袋白うるり　九八

人形屋木偶の下地の白うるり　一一八

根のないことか種もない白うるり　一三三

根を堀れば糸瓜のような白うるり　一四二

つれ〳〵草の実だといふ白うるり　四四

不朽洞会から

▼路郎師は八月十三日大阪図書館で開催された大阪府文藝懇話会へ出席された▼蛭子省二氏（愛媛縣）は自轉車に同乘され山奥一里余の御祓村二六会句会へ出席された▼福田山雨楼氏（横浜市）の闘病生活もやや軽快との報に接しましたが、油断は大敵なので一層の加養をお祈りする▼路郎師は八月廿五日大阪駅十時五十分發で弓削へ出張され途中川雜岡山支部へ立ち寄られ二十二時すぎ弓削着、翌朝、句碑揮毫十一時五分で燈阪の途につかれた▼大森娛句樂氏（岡山縣）は熊山駅長に栄轉と共に川雜美作支部から川雜備前支部に轉じ、八月廿六日に備前支部での歓迎句会が催されたと▼戸倉普天氏（兵庫縣）は「丹波新聞」の柳壇選者を担当されることとなつた▼福島鉄兒氏（岡山縣）は西日本川柳大会と弓削駅頭の路郎句碑建設の宣傳及情報連絡係として奮闘されている▼富士野鞍馬氏（清水市）は全國浴場新聞八月一日号に「江戸川柳に見る湯番・湯汲」を執筆された、なほ八月十五日PKから川柳コントを放送された▼山分淑郎氏（岡山縣）は八月七日午後八時頃高圧電氣三五〇〇ボルトに感電し三米のところから落下九死に一生を得られたとのこと自重をお祈りする▼水谷鮎美氏は八月十九日の夜行で那智山へ赴かれた「雨雲の山に眞白ろき滝聖し」の句を寄せられた▼富士野鞍馬氏は「路郎大人の句碑建立を祝て」と前書して「川柳が地球を確と踏みしめる」と云う句を寄せられた▼小西無鬼氏（兵庫縣）の通信に、家沢齊花氏が九月十二日に啓年で一廉篠山配電局の聯員の籍が拔かれるので九日に送別句会の予定だとのこと▼黄瀬美秋氏（滋賀縣）は九月四日から兵庫縣加古郡荒井村、高砂鉄道病院三号に入院寒くなるまでをそこで加養する由▼直原七面山氏（岡山縣）は近く上京、約二ケ月半在京とのこと▼田辺由布氏（西宮市）はジェーン颱風のため高潮で床上浸水、親子三人無事との事▼水谷鮎美氏（尼崎市）は七月下旬に盗難に遇はれ、今回のジェーン台風では床上浸水二尺五寸の水禍、重ね〳〵の不幸にもめげず元氣でいられる▼科野稚美氏（大阪市）はジェーン台風のため家屋が倒壊、阿倍野区へ避難された通信は阿倍野区晴明通一特殊紙器工業株式会社気付のこと▼塩浜一路氏も家屋が全壊した通信は福島区浦江中二ノ五角一ゴム株式会社氣付▼石岡正司氏（兵庫縣鳴尾村小松宮南十三）は床迄浸水▼長谷川三司氏（尼崎市）も床迄浸水、その後二階生活とのこと目下被害地会員の消息は詳細不明である▼水谷鮎美氏（尼崎市）は阪神電氣鉄道株式会社より二十五年勤続の表彰を受けられた。

――新会員紹介――

八月

山中志乃布氏（大阪市）正　茂乃女史推薦

九月

桑原表情氏（大分縣）正　茂乃女史推薦

近作柳樽

病ひ抜けの女將タイプを取り戻し　大阪市大門
てんやわんやさせて稅吏のお、氣持　同
餞湯を出て旅人に道聞かれ　同
キャンデー屋も立って見てゐる九回裏　同
会計はあみだ籤でも運がよく　同
待たしてる名刺の上に駒を置き　同
梅鉢の浴衣干してる祭過ぎ　同
資本家とよばれる友の水くさし　大阪府きはち
皮鞄晩のおかずも入れていに　同
終発にやつとまにあふ職をもち　同
アベックの男しなびた顏でゐる　同
中元をもらふ身分に程遠し　同
彌次喜多もヴギを歌って江戸を発ち　同
白足袋の男の職が世襲なり　同
訪へばまだ派手な布團の〻の部屋　廣島縣芳泉
見合する着物は姉が貸してくれ　同
露含む苺に似たる唇の色　同
口惜しさは肉体テストまできれて　同
寝首でも掻きに行く様にカマ歩き　同
儲け様がまだ〳〵足らぬシャツの継　同
学校がよほどきらいな隣の子　尼崎市ちか子
隣の子偏食らしい細い首　同
隣の子すぐにおぼえる流行歌　同
おばちやんとすぐに抱きつく隣の子　同
隣の子大人もだます嘘を言ひ　同
先生もみはなして居る隣の子　同
昔から自作お世辞を心得す出雲市へ　どち
割当はどうあろう共田植する　同
嫁丈が田植の唄に加はらず　同
田植して地球を青く塗りました　同
顧みてミス夥し田草取り　同
流行の海水着です臍が見え　高知市桂夢
キッスしたばかりに退けぬ破目になり　同
パン助に未來を問へば笑いこけ　同
酒煙草やめて時世にまだ追われ　同
妻四十いつの間にやら経覚え　同
濃い紅再建途上とは見えず　今治市文庫
何か事あれと失業期して待ち　同
決死的投げ賣するも死ぬは嫌　同
入金へ蟻の甘きに寄る如く　同
他所の兒の無暴見て見ぬ振りで見る　同
名に恥じる程の名もなく金をため　愛媛縣旭童
老人の怒りは独り言ですみ　同
倖せはどこにあるのか忙しい　同
莫吸いにきている如き魚つり　同
嫁き後ればかりかゝえて嫁の自慢　同
カロリーは云はず茶漬に茄子漬　金沢市陽々
子は育ちもう筋道を立てゝ云ひ　同
兄ちやんはまだ学校かと病いの子　同
風邪などを引くなと駅へ見送られ　同
糠雨にまだ野球の子帰らない　同
チツブまで勘定されて雇はれる　布哇純香
レインコート脱いだ女にちょいと惚れ　同
処女でない証拠は僕が握つて居　同
女房は僕より以上に僕を知り　同
新米の飲み過ぎましたとも言へず　同
朝鮮の地図を拡げて相場訊く　小松市茶佛
勤怠に睨みがきいたのも昔　同
少々の金につまづく会社です　同
滯納の額が資本を遙か越え　同

古川柳と歌舞伎を彩る女（二）

水谷竹莊

義經千本櫻

（一）釣瓶壽司屋のお里

繼盛がこはだのとげをお里抜き
繼盛は見ても居られず海苔を焼き
つるべ鮨みそふたもじで彌助賣り

この鮨屋の淨瑠璃の語り出しに「花咲かす娘がつけた鮨ならば、なれが良からうと買ひに來る、風味も吉野下市に賣りひろめたる所の名物」とあるやうに、この釣瓶壽司は娘のお里を看板娘にして繁昌したらしい。

そして下市村の若い者は「あの彌助といふ若いのが氣になるな」と彌助実は繼盛さんの悪口をいひながら毎日釣瓶壽司を買ひに行つたものと想う。又この歌舞伎はお里の文句ではないが「雲井に近き」繼盛ともあらうものが、金助かりたさに、鮨屋の親さんになつて、出前の鮨の空桶をかついで、ヨチヨチと歩いて來たり、いかみの權太が首桶を抱へて駈け出したかと思ふと、梶原樣が家來を大勢引連れて乘込んで來たりしたから、当日の下市村の騒ぎは大変なものだつたらうと想像されるが結局、総領のいかみの權太は腹を切つて死ぬがその代りにその釣瓶壽司（又は彌助鮨）とも言ふが、今に殘つて栄えてゐるのは、義太夫本の鮨屋の段切に「思ひはいづれ大和路や、芳野に殘る名物に繼盛彌助といふ鮨屋今に栄うる花の里その名も高く、あらはせり」とチヤンとその昔に予言してゐるのも面白い。

三位中將繼盛卿も吉野下市の釣瓶鮨屋彌左衛門の居候彌助と成つた以上は只じつとばかりもして居られず海苔をあぶつたり、こはだを開いたり、手傳をするのはいゝがなれぬこととて魚の骨を指に刺して娘のお里に抜いて貰うなどした。であらう事を詠んだ句である。

このお里の上手な役者は、死んだ宗十郎、関西では中村富十郎が旨い。

（二）道行初雪旅の靜御殿

チヤンボンで出る忠信は狐なり
狐忠信と云ふ見得で鎌きつちよ

ありたきは靜玉屋に数の間

吉野山は南北朝時代の事は省くとして義経千本櫻時代にはお芝居的人物がウロ〳〵歩いたものだ。義経が吉野山へ逃げ込むと、その後から靜御前が例の鼓をポン〳〵鳴らしながら通ると、狐忠信が又その跡を追つかけるといつた樣に、義経には卿の君といふ正妻があるのに、この第二号の靜御前の方が惚れてゐて山といへば川、義経といへば靜御前といふやうに二人の名前は合ひ言葉の樣にいつもつい

あれつきり音沙汰のない兄を持ち　同

唐司氏の死

あるときは川柳の光射す如く　貝塚市梵鐘

虫の音に負けず咲け咲け秋の草　同

かまきりは娘のように振りはらい　同

颱風を雀は雀なりに避け　同

ギヤバズボン穿いて喧嘩に手を出さず　同

とろ〳〵に酔はす酒場の灯がにくし　岡山縣苑女

家計簿赤のインクの瓶は空　同

墓参り母道端の麦をほめ　同

円満な夫婦時計の針のやう　同

満腹の他に余念のない豚兒　愛知縣吐平

事金に関して妻にへりくだり　同

もうこれで産まぬつもりの腹を撫で　同

役得が目につく頃に轉勤し　同

飽きもせず女まだ〳〵着る話　愛媛縣鍛明

ガマのそり〳〵古里暮れんとす　同

女三十肌もあらはにねてしまい　同

妹におごつて貰ふとはあわれ　同

借金が出來るうちはとおだてられ　高知縣十四郎

穏る秋流すお米やつぶす米　同

大学は東京職は村役場　同

あの馬鹿が金の力の恐ろしさ　同

宝くじ折目もつかず外れけり　和歌山桑南

無花果へ鼠のルート断つ鋏　同

男親時には愛を疑はれ　同

泣声のもつと低くけりやほつとかれ　同

人間の弱さが悪い酒にする　岡山縣藤波

病床を移せば蠅が先に來る　同

飲む癖に家では爪に灯をともし　同

親の鐵尊く見える年になり　同

子供はいゝな手放しで泣けて　米子市鱒三

坊ちやんと呼ばれ僕の子またたい　同

エネルギーの余分で壁を撲りつけ　同

年限で行けばお前が今所長　同

当節の生き方知らぬ野人ぶり　東京都東夢

正義感清く別れて悔があり　同

十畳の部屋に一人の旅の宿　同

膝頭まるいズボンは職がなし　石川縣光郎

釣竿の値にまだまだの鮎をつり　同

避姙藥効かなかつたわよと新妻の　同

考へりやホンに馬鹿げた世話女房　岡山縣千富爾

母の氣が汲める七ツの子がいとし　同

父と子と仲良くまくらはづして寝　同

愛すればこそ看病も嬉しくて　大阪市葉光

禁断の木の実の味を知らず病み　同

べんちやらになりそうで笑つて默つて居　同

戰爭はいやだ寝轉んで煙草の味　大阪市卯門

感情を押えて白髪増えてゆく　同

子の文化親爺の文化に盾をつき　同

浴衣着てもう事務員でない化粧　愛媛縣曉明

ささやきは花火と遠いとこでよし　同

一家の光は母ですと本にあるけど　同

蔭干にして飛石のきやしやな靴　八代市斗四翁

食糧の闇をしないで死んだ人　同

頬杖が長い女のバルコニイ　同

大臣の浮名初号で拾はせる　熊本市無六

幾久しく添ふても五十年足らず　同

金モール捨てても髭をすてきれず　同

すゝり泣き税吏つめたく聞いただけ　廣島縣愛鳩

去年來た税吏が熱で死んだとき　同

夏枯れえ眞空管はきれたまゝ　同

ラブレター字引を引いて書いてある　廣島縣季贊

降職へ妻だけ情深くする　同

新世帯西瓜一個をもて余し　同

いゝ年と笑はれそうな野球熱　岡山市忠美

細君の奥の手だん〳〵板につき　同

戀飛脚大和往來の梅川

忠兵衛は二両ならしに使ひすて勘忍を八度忠兵衛つかひすて

恋飛脚大和往來よりも、むしろ大津絵の文句が名高い二十日あまりに四十両つかひ果して二分残るより割出された句で、毎日二両づゝ使へば二十日で二二が四十両になるとの勘定だろう。又昔の俚諺に勘忍五両と云ふことがある、一度勘忍すれば五両の利益があるとの意味で五八四十両の儲けになる算用。梅川が他の客に身請されると聞いて忠兵衛は飛脚問屋仲間の八右衛門宛に來た江戸爲替の五十両を無断拝借して、梅川身請の手付とした、折も折とて、八右衛門がその金を催促に來たので平謝り、其場はそれですんだが、その夜忠兵衛は新町の廓で、他人の金三百両をバラまいた。男の意氣地とはいへ、女のために命までもかけうる恋は一寸羨しい。

忠兵衛は贅六だけに二分殘し

残つた二分は梅川で奢るなり

梅川と忠兵衛は大阪をのがれて、忠兵衛の故郷大和の國新口村（百姓孫右衛門の伜で、大阪の爲替問屋亀屋の養子になつてゐたのである）へ道行をしたのはよいとして、四十両の中からたつた二分殘したとは贅六は丈けに呆れ返つて廻る、それで静も義経との恋愛生活に感激して後日鎌倉方に召捕はれて八幡宮の社前で踊らねばならなくなつた時、彼女は「静や静静の苧環くりかへし……」云々といふに事缺いて義経のノロクをいつて只々朝を煙にまいたものである。芝居では中村時蔵の静御前、阪東三津五郎の狐忠信がよい。

高級化粧料容器には勿論！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市大淀区西兵庫
西通一丁目四番
山銀株式会社
電話堂島四四七番

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北

桂川連理柵（カツラガワレンリノシガラミ）のお半

其儘に月も流るゝ桂川

肉体に引かれる年でない筈を　同
戰後派の恋文会社のですまし　東京都蛙　声
手形法詳しくなつた金を借り　同
裸体美の女のうしろ雲と空　同
旅疲れ忘れて土産ひろげ立て　愛知縣竹　坊
蟬捕りのおらなくなつて蟬は鳴き　同
人殺の鰺に裁判出來もせず　同
看護婦の歩けばひゞく肥りよう　貝塚市千　舟
千原庸司君の死を悼みて
手術室君解剖の灯がともり　同
別染の浴衣で通ふ藤間流　同
無雑作に功七級をメタルにし　佐賀縣えいを
鶏を話相手の日が続き　同
雲仙に遊びて
雲仙を即かれ霧だけ話しとき　同
扉閉める音戦首らしい音を立て　熊本縣月　仙
いい出せずいたる時間の來たボート　同
温泉の宿を男ばかりは飲むばかり　同
心中の旅は支線に乗り替える　大阪市紫　郎
サングラスヨットは沖へ沖へ出る　同
初恋の温泉町に來てしまひ　同
パパとなる楽しみママとなる苦労　岡山縣露　外
地方税改正
未亡人免税になる不仕合せ　同
友白髪なぞおかしくてもう戻り　同
盂蘭盆会夫の位碑なでてみる　岡山縣悠貴女
たばこ干す匂ひに暮れる山の家　同
街の灯よいつか知性の崩れて來　同
ガールフレンドさらら息子を訪ねて來　大阪市弧　舟
ウチはもう子供やないとツンと拗ね　同
もうそんな時間ですかと話し好き　同
自惚れの話が嚙んだ飯の砂　米子市富　郎
窓閉めて夜行に一人寝ると決め　同
蚊帳越しの女は派手に眠りこけ　同
女学生曰くチャタレイ夫人貸しましょか　下関市侃　流
働きたいけれど基準法が邪魔　同
子子のふるは金魚の爲ならず　同
浮瑠璃が語れる程の金が出來　兵庫縣五厘棒
一線を越さぬ約束ランデブー　同
凉台どちらからとも無く歌ふ　愛媛縣孤　峰
雨の街ダンスホールの灯が滲む　同
恋知つて今日もようやく終列車　大牟田風　浪
結局は孝行恋を諦める　同
好きですと云はず奥さんもらひなさい　奥　市梅　香
ナイロンのバッグが慾しい春の色　同
得点にもめたボールが露にぬれ　奥　市史　球
百円を得る困難を知れ税吏　同
金詰りか平和か夜汽車よく寝てる　三原市正　一
夫婦して指の太さを笑ひ合ひ　同
極量を越してるくせに飲みたがり　大阪市春　雄
未亡人手の静脈に秋を知り　同
ワイシャツを脱ぎくもめる月末日　布施市柏　葉
交叉点ビルから退けた白い顔　同
商賣へ頑固な個性出して悔ひ　高知市一徹郎
アベックの月見はじやまな雲もよし　同
病床は夜市の花火聞いたゞけ　堺　市太・路
握手したい氣持ちお熱は有りませぬ　同
夜の汽車前の女も無口なり　兵庫縣梧　櫓
無理のないぐちを思はず叱りつけ　同
元刑事成る程すごい目付きなり　守口市万　平
退院を言渡されて名残り惜し　同
強引が総てを委す氣にもさせ　東京都高　志
今日も亦「本日限り」と書いて賣る　同
やはり金持つた子供に友が増え　鳥取市吾　柳
流儀まで即かにや解らぬ花をほめ　同
列車事故嚙んで含めて母は出し　岡山縣吉備平
橋一つ越した桃源郷で飲み　同
ひとり寝の今宵半分蚊帳を吊り　鳥取市芝　道
やせ腕にやつぱり嬉し兒の背丈　同

背負はずとおろせばいゝに長右衛門

伊勢参り石部で堅い中となり
生娘を帶屋がしめた伊勢参り

お伊勢参りの下向道、石部の宿の仮まくら、男は四十二で女は十六、今でもあまり年の違つた同志が恋愛をすると、お半長右衛門の様だといはれる。

お半は京都の町人、信濃屋の娘で、当時十六歳の娘であつた。その隣の帶屋の長右衛門と愛し合つて遂にお半は懐妊したので、二人は駆落ちをした。差当り桂川にお半の乳母が居つたので、其夜は乳母の家で泊り翌朝旅に出るつもりであつた。お半の親は商人であつたのでお半は路用のため親の有金若干を盗み出したのを乳母が知つて悪心を起し、金があるなら明日まで預けよといふまゝお半はうつかり渡してしまう。乳母は金に迷つて息子としめし合せて、眞夜中に両人が熟睡中に忍びこんで縊り殺してしまつた。そしてお半と長右衛門の着物の褄を結び合して桂川にすてゝしまつた。一両日の後、二人の死体が浮び上つた。お半の親達は勿論、世の人人は情死と思つてその死体を葬つた。長右衛門は年四十二、ふさわしからぬ心中だと世評がやかましかつた。

そして翌年お半の一周忌に当り、お半の佛事をするために桂川の乳母をも招いた。

そして、御馳走を作るのを手傳はせた時、牡丹餅を造るため、乳母は煮た小豆を摺つた。何心なく諸肌をぬいで小豆をつぶして居つたが、其時に乳母の着て居つた襦袢は、お半の襦袢であつたので、主人夫婦は、乳母を疑つて、ひそかに町奉行に訴へ出た。乳母と其息子は召捕へられて、前の悪事を白状した。そして、母も子も厳刑に処せられた。是は安永年間の事であつて、この説は古く京都の人が語り傳へた説である。

肉体に自信を見せた　大模様　東京都臥竜亭
雲の峰はるか鎌倉逗子葉山　同
憎しみを遠く女の振り向かず　横浜市智　水
追ひこされ追ひこされ馬鹿な自分を見　同
後取りを先づこしらえて産制し　岡山縣美能留
二号なり顔も着物も歩き様も　同
藥とは知らず包を子のねだる　岡山市三　葉
氷枕干して明るい家となり　同
傳記には母の苦労も書いてある　米子市雄　々
鮎の春を乘せて最終バスは発つ　同
対立へ女默つて涙ぐみ　岡山縣加　代
もう少し叱つてほしい幸福さ　同
あきらめがつかぬかもいふ母やさし　岡山縣夜　潮
本堂に昔のまゝの地獄の絵　同
胎教へ女の弱さ悔い続け　長野縣柳　兒
風采を整え金策に出るみぢめ　同
チップ五仙ウエイトレスを笑はせる　布　哇東田楼
金貸せと云つたら勤倹貯蓄論　同
年頃が男の口を疑はず　豊中市直　郎
読経のお盆を暑いものにする　同
新築の床に三代続く軸　米子市風　廛
新築をすれば保険屋うるさく來　同
任官の名刺やたらにくれたがり　熊本市安　彦
詐欺師ともしらず名刺へ恐れいり　同
嬶曳を夜警ふぜいにおどかされ　富山市壽　郎
エチケット守れば氣障な奴にされ　同
革靴を縫ふやう手術終りです　岡山市四　案
われ哀れ病院通ひで朽ちる身か　同
どの顔も好い人らしい墓掃除　大牟田一　葉
妻入院
屁が出たの出ぬのとみなに氣遣れ　同
草野球一人前の背番号　奥市しずを
たゞ一つ日傘があつた渡し舟　岡山縣無　聊

不調法だがビールの苦味捨て切れや　倉敷市千代男
浴衣着てカメラに入る米選手　大阪市葉榮子
生きるにも死ぬにも金のかゝること　兵庫縣草　右
マネキンのようには行かぬメーキアップ　名古屋文　枝
稲妻へ夜のアベック見破られ　岡山縣至　孝
盆踊りテンヤワンヤの踊子よ　大阪市露　草
何事にすねたか蚊帳の外に寢て　鳥取市柳　窓
別居の日ながく続いて今日も雨　鳥取市壽　明
空家に入れば空家の蚊にくはれ　宮崎市卯之助
選挙戦天下晴れての嘘がいえ　倉敷市素身郎
治安維持それが誇りの志願です　鳥取市十字星
邸宅の門賣りますと貼つてあり　鳥取市なぎさ
激情を月へぶちまけ淋しい日　今治市青　雨
サンダルの指に氣兼ねの靴磨き　大阪市二　桂
今日の釣り夕に妻に笑はれる　鹿兒島華　水
親がありその背流す幸思ふ　岡山縣敬　貢
哲学書死ねとは書いて無きものを　出雲市まさる
大の字に寢られるだけがまだましさ　下関市九呂平
いつわりが多いと女さげすまれ　岡山縣宣　子
申告を娘にまかせ夕涼み　大阪市樂　天
年頃の小さき憂ひへ母と居る　大阪市喘　六
國会で默つて居るが車中談　兵庫縣初　夫
僞つて映画觀て來た顔でなし　大阪市春　峰
一家心中知らずに大輪咲いてゐる　愛知縣北　雷
或る夕べ若さが欲しいふと思ひ　岡山縣梯　梧
戯れに子にたゝかれて親の味　山口縣秀　峰
花嫁を見がてら電話借りに行き　兵庫縣指　月
それとなく娘見に來し涼み台　岡山縣鴻　峰
本箱でマルクスボーイだとわかり　岡山縣百　郎
クシャミ出てアイラヴユーを云ひそびれ　大阪市志　津

古川柳に現はれた句は、道行と云へば手に手を取つて花道から出るのが紋切型であるのに、御苦労千万にも女を背負つての死出の旅、又月も流るゝは、お腹に溜つた月などを背負込ますと、さつさとおろして仕舞へばいゝのにの句案であらう。

恋の重荷は芥川桂川

お半長右衛門ばくちのやうな色
抱いた子を負ぶつて逃る桂川
道行でいつち大儀は長右衛門
長さんへ又負ぶつてと三途川
うたかたの泡と消え行くお半が
屁
二條の后を背負つた業平が渡つた
芥川も、お半をおんぶして桂川へ
身を投げた長右衛門もいづれおとらぬ恋の重荷だつたとの句

芝居では阪東壽三郎の長右衛門、中村富十郎のお半、中村時藏の女房おきぬで、食潤南北氏の演出で、今年の四月大阪歌舞伎座で大当りをとつた。

社の黒板

▼「川柳雜誌」のバックナンバーが少数宛ありますので分譲いたします。御希望の方は往復ハガキで在庫の有無をお問合せ下さい。

▼読者の方で句会案内の欲しい方は社内句会係まで申込んで下さい。

添削會

會員募集

▼添削・批評を希望せられる方は左記小規により至急申込まれたい。

☆入会希望者は住所、氏名、雅号職業、生年月日記入の上申込む事

☆作品は、一人一回五句（全費同封）

☆全費一回　百円（二円郵便切手代用可）

☆添削原稿返送用の封筒に宛名を記載し切手を添付しおく事

☆講師指名のこと（指名のない場合は当方で適当に処理）

☆講師
麻生茂乃先生　福田山雨楼先生
須崎豆秋先生　水谷鮎美先生

申込所　川柳雜誌社内
川雜川柳添削會

雜筆春秋

選者のこと

吉田水車

川柳が一般的に文学的に水準が低いとする事は遺憾乍自他共に認めぬ訳には行かない。しかしそれはいろ〳〵理論やせんさくは別として、端的に言つて作家の育成の方向が間違つて居る。句会や誌上の添削も大いによろしいが、第一小集や句会で実際に行つて居るのは少し器用に作句出來るのや、小集の幹事に当る人々にすぐ選を持つて行く事である。半年や一年の作句経験で、たとえ非公開的とは言へ選者に推すのはそれがより以上にその人の精進をたすける一方法であるかも知れぬが、誤つた措置であると思う。(作句経験の長い人が必ずしも選者資格を持つと言う意味でなく、こゝでは單に比較の意味である)こゝで選者資格が問題となるが、やはり人生を川柳にさゝげ発展向上につくされた良識ある先達者こそ選者として指導を仰ぐにふさわしい人であつて、かゝる川柳家は各地に必ず一人や二人居られる筈であるからそう言う人々の選評を得るようつとめるのが、所詮は川柳上達の早や道でもあり常道である、と言つては單に古い人がよいと言うに止まるかも知れない、すでに老齢となり来作に遠ざかり思想的にも新鮮味が欠けてゐると言う人も居られようから、一應選者の標準と言うような事を考えてみると、結局現役作家である事と、柳誌主宰及至はそれに準じる同人級の人であるのが必然性もあると思う。小集等によくある例に、作家数より選者の方が多いと言う事は決して、川柳の向上ならびに作家自体ののびるやり方ではない。しかしお互いが作句を批評し合い作句力や批評眼を養う事は又自ら別であつて、いわゆる選とはちがつたものである。をよそ選と言う事は「選も亦創作也」であつて権威と共に重大な責任がある事は勿論である。それ故この二面を完全に果たし得る事が選者資格とでも言うのである。

たとえ非公開の小集でも選者となつた者は多少漫心も出る漫心は万事の行き詰りである。端的に言つてある柳誌の支部や小集の世話をたのめば、お義理にでも選者をたのむ事にもなるのだが——事実そうした幹事級の作家はたしかに有為な人達ではあるが——それがそもそもいけない事と思う。支部や小集にも主宰側から絡るべき人を派すべきである。とにかく軽々しく選者をえらぶ、言い替えれば選者になれる事自体に川柳の自家撞着があり、発展性を失う危険があると思はれる。川柳は作るも易いが、選者推挙もす算であるとの一方の親方のあるのも当然ではあるまいか。

俳句から川柳へ

安川久留美

私の知つた俳人Sさんが俳壇でむつかしき山車人形の名を忘れという句を拔いている。七尾市の「青柏祭」を詠んだもの、作者は小年らしい。それにしてもこの句風に私らが若い頃に作つた川柳調のあることを見逃せまい。

初めて「笹載」という雅号で北声会という俳蓮に座を占めた時

演習此方見らが戯戦や鳴く蛙

といふ碧一派の破調がわけもなく好きで、私も初めて松下紫人さんとあうた時

霧はるゝ撮影の苦心成りもせで

という自由律を作り、一点か二点ぬたけのを欣んだもの、秋だつたら「霧」が課されたので、俳句も雜詠だつたら、前句山車人形のやうな句を平氣で無心で投句するのであらう。だから句を作る者が少年でも老人でも、そのまゝを句にすればいゝ時代が來たのだ。俳句

靜かなる境地

——千原庸司氏の死——

河楊梵鐘

一部では明日から盆にゝろうとする八月十二日朝七時、千原庸司氏は忽然と逝つた。私にはまつたく急逝の感がした。いや、私には氏がこの世から消えてしまつた様な氣がしないと云つた方が本当らしい。

三年近くもベッタリ床についてその間少しはベッドから起き出し植木鉢をいぢつたりして、私達に希望を持たせた事もあつたが、それも長くは続かず、喀血が又してもベッドに針付けにしてしまうのであつた。そして去年頃からは幾度か安否を氣遣われながら、その都度危機を切り拔けて、皆の眼を見張らせて居た。それが——

七月の初め、突然千舟氏から「庸司氏が今度は本当に危険だ」と云う知らせを受けて、兎や斯う思いを馳せながら氏の病床へ出向いて行つた。

庸司氏は病床に軀を斜にねぢ向けたまゝ、死期の近付いた人がよくやるあの不安な喘ぎ方をしていた。私は、こゝで迂闊な態度をして妙な感じを與えてはならないと思つた。静かに「苦しいですか？」と尋れた。

「こんだア駄目です。こんなに腫れてますからね」と意外に元氣な声ではあつたが、あきらめた様にむくんでいる足を示した。

私はその事を考えて居たところであつた。足がういたらもう駄目だと一般に常識のように云われている。顔や足のむくんでいるのは可成り心臓が弱つているのだろうし、不安を覚える。だが、これからでも最善な狀態において心臓の安定が保ち得られたら、危険から逃れる事が出來るのではないか、と。

「意識のあるのはあと二日位でしょう。もう三日目位には意識がないと思います」と庸司氏は、これから自分の辿る道を見極めて居る様なことを、平静な口調で云つた。

私は庸司氏に單なる氣休めの言葉などかけようとは思わなかつた庸司氏は自分の軀のことをよく知つて居る。ある程度の医師以上に自分の軀の狀態については詳しいだろう。そんな人に薄ッペラな氣休めが何になるだろう。庸司氏は多分、自分は数日のうちに死ぬと思つているに違いない。冷静なうちに、しかも自信に満ちて頑なにそう思い込まれる事は恐ろしい。

はいつ迄経つても「名月やたゝみの上の松の影」の如き句風を繰り返すやうでは、川柳にも顔負けする。つまり、行きつまつた俳想のつるがツイに川柳という畠え、「オイ兄弟衆、たのむぜ！」といつたやうな挨拶でのしかゝつてきたやうな感じがする。（七・二五）

川柳と理心

靜岡　忠八

ぢつと考へて居ると、ぢつと見つめて居ると、なんでも川柳の題材になる様な氣がするのだが、さて一句にまとめる段になると、むつかしい。それは川柳ばかりでなく文学作品のすべてがそうである。頭が澄んで落ちついて居る時は次から次ぎと、なんぼでも川柳が出来る。それと反対にいらいらして心が曇つて居る時はいくら川柳を作ろうとあせつても出来ない。作品の出来、不出来はその心理作用に正比例する。川柳に依つて人生や生活の苦悩を忘却する事が出来たらある意味に於いて幸福かも知れない。だが私は現実逃避のために川柳を作るのではない。むしろ現実とぶつつかつてそれを切りひらくために川柳を作る。

人間的欲求、生活、政治、あらゆる社会現象を正しく認識し、それを改革し、向上させるにはどうしても実践が必要である。

川柳も単なる川柳でなく、人間の胸から胸へ、鼓動を傳へる迫力と魂の躍動がなければならないと思ふ。

碁と將棋と川柳

山本　葉光

路郎先生の歴史的な時事吟に待つたなしの歩にさゝれたる　犬養毅

と言ふのがある。歩は將棋の歩だ。「話せば解る」の名言と共に忘れられない句だ。

関西の將棋では名人戦の度に、大山、升田の名が出る。その大先輩に、劇や映画でよく知られた関西名人の奇人、坂田三吉翁がゐるが、彼は私が曾つてゐた伶人町に住んでゐた。私の小学校の頃、従弟の同級だつた息子と共に、坂田氏の二階にあがり込んで床の間の將棋盤を持ち出し指してゐると、坂田氏が帰宅したので慌てゝ逃げて帰つた想ひ出がある。

従弟は子供仲間では、將棋が一番強くて、大人を敗かして小遣をもらつてゐた程だつた。

夏休みになると宿題も日記も、ほつたらかして蜻蛉捕り蝉取りの他は、この従弟と將棋をして、先手がならず勝程になつた。センチの香車詰め、郷の桂馬詰めを競つた事もある。碁も父の物眞似で兄とよく囲んで見た。兄が海軍に行つて帰へると凄く強くなつてゐたが、間もなく白石でかならず勝つようになつた。歩行が不自由になつて、相手がないのでそれから後はすこしも強くなれないが、新聞の棋譜を読物として愉しく見てゐるにすぎない。チエスも二人でするもので、指し方ぐらいは研究もして見たが、麻雀はそんなわけですこしも知らない。

歩行が不自由になつてから独りで楽しめるものはラヂオを聴く事と、活字を読む事で、それを唯一の修養としてゐる。文字を書く事は便りを貰つて読む爲めに自習するに過ぎない。

絵も模写はよくして楽しんだが、創作的な発展は出来ず、唯一つ川柳だけは、三度の飯の様に、飽きもせず続けてゐる。

始めの間は淡になると口惜しかつたが、今は、碁や將棋と同じように負けたり淡になると、よい修養になると思へるようになつた。

病人には川柳は一番精神の良薬と信じてゐる。

詩人の幸福

麻生　梨里

印度人は雨が降ると、雨の後は必ず霽れると喜び、天氣になれば必ず雨になると悲しむと言う。幸福と言うもの程不安を感じるものはない。物には頂点がある。それが最上のものであれば必ず坂を下る。不幸な中から上を見てゐるとき今に幸福になれるやうな氣のするものである。幸福なとき詩は出来ぬ。幸福な事柄そのもので充分心が満たされてゐるから文字に止める余裕を持たぬ、不幸を幸福に感じ汚いものも美しく見るときこそ、文字に止めたいと言う欲望が湧くものである。詩人は幸福であつてはならぬ。詩人が幸福になれば詩人としての生命は終る。

何とかして生きのびてほしいと希つた。

私は敢えて庸司氏の言葉に逆らわずに

「一般にとやかく云われている徴候が見えたとしても、それは絶体のものぢやないと思うんです。足がむくんだら死ぬとか……。誰からももう駄目だと見放された人で、生き永らえて丈夫になつている例が幾らもあるで　よう。もつとも氣が弱かつたり、自分で助からないと思い込んでる人は、本当に自分を助からなくしてしまうでしょうが……。脚氣でも顔や足がむくみます。出来るだけ心臓に負担をかけない様にして、生き永らえる様に努力して下さい。頭からこうだと決めてしまわないで頑張つて下さい。」と云うと、

「そりやそうです。與えられた天命を何も死にいそぎする事はないですからね」と庸司氏は素直にうなづいて私の言葉を聞いてくれた。

私はこの素直さに心を打たれた多くの人の心の中に頑なものがあり勝ちであるのに、庸司氏の心は実に幼児の如く素直で、禪僧の如く静かに澄みきつて居るように思えた。

それから四五日のうちに顔や足のむくみはスツカリひいて、

「また取りとめましたよ」と笑顔で云う位に庸司氏は元氣を取り戻し、また〳〵人々を不思議がらせたのであつた。

そして、十日……二十日……一ケ月の後、喀血して、思いがけなくそれが最期となつてしまつた。これはおそらく庸司氏にも予期されず、急速に襲いかゝつた死であつたかも知れない。

庸司氏の念頭にはつねに、川柳と路郎先生とがあつた。初め、死を予期した時に、私が「何か用事があれば……」と問うたのに対して「路郎先生に知らせて欲しい」と云うだけのれがいであつた。

早々に路郎先生は病床を見舞われた。庸司氏には父に接した如く嬉　かつたことであろう。そしてそこにはもう一つ、敬慕する豆秋氏から、いたわりの泌んだ見舞いの句を寄せられた葉書があつた。

その夜、庸司氏はスヤ〳〵と爽に氣持よく眠つた。この二つによる幸福感と安堵感が庸司氏の心身の平静を保たしめ、当時の危機を逃れさせたものと私は思つている。

「私にとつて川柳は、私の宗教だ」と云つていた庸司氏には、まさに川柳が奇蹟の如く威力を示して幾度か死線の彼方から、人々に異常な感を抱かせながら、立ち直らせていたのだと思う。

私は、川柳が宗教とまでに氏の心に深く根をおろしていた事を、具体的に人に示すことは出来ない。然し私はそれを感じて居る。

庸司氏の死は実に『往生』の感があり、痛ましさを覚えさせないそれはたゞ『無』の境地へ入つて行つたように思えるだけである。

にきびとり美顔水
桃谷順天館

森東魚畧年譜

福田山雨楼編

明治、大正、昭和に於ける古句研究家として重きをなしていた森東魚が昭和廿年十月二日に北京に客死してから滿五ケ年の月日が流れた。本稿は福田山雨楼氏が昭和廿三年十月に寄稿されたのであるが発表の機会を逸し編輯局の筐底深く保存されていたものである。（編輯局）

▼明治廿二年（一才）三月廿八日東京市神田区栄町に生れる。本名栄一・兄弟は兄ほのほ氏一人のみ。▼同卅八年（十七才）前川直太郎氏から川柳をすゝめられ作句す。みの作と二人で久良岐の「川柳梗概」を上野へ買いに行く。▼同四十年（十九才）第一高等学校二部甲（工科）卒業（湯島小学校、府立四中を経て）▼同末期日本派の俳句に傾倒明星派の和歌にも心酔す（俳句の師匠は伊藤松宇翁）▼大正二年（廿五才）七月東京帝國大学工科大学建築学科卒業・七月伯父の経営せる請負業合資会社有馬組に入社、朝鮮、九州など工事で押歩く。▼同五、六年の頃久良岐門に入り教を受ける。雅号の東魚は久良岐の命名▼同七年（卅才）四月「川柳花束」創刊、同人に加わる。——花束は八年一月で休刊、なほこの頃から伊藤夜叉郎などと知り久良岐社に出入りして本格的となり古句研究に面白味を覚え大いに熱あがる▼同八年（卅一才）縫谷氏長女菊子と結婚▼同十年（卅三才）二月「川柳詩」夜叉郎が編集発行人、創刊同人に加わる「川柳詩」は十一年六月で休刊。▼同十一年（卅四才）東洋コンクリート工業株式会社に入社八月長男を挙ぐ▼同十二年（卅五才）九月関東大震災には焼けず崩れず一同無事・九月会社を辞し自営的に焼跡復旧建築に奔走▼同十三年（卅六才）四月株式会社松村組に入社。▼同十五年（卅八才）三月重役と口論したのがもとで堂々と退社。九月親友夜叉郎（卅九）逝く。昭和二年（卅九才）一月五日厳父雪雅翁（七二）長逝、厳父は夜雪庵金羅の門、俳人であつた。当時の住所は東京市下谷区花園町七・八月「川柳雑誌」の客員となる。爾來永眠まで不朽洞会の賛助員として継続・飛島組に入社信州の山中に水力電氣工事に従事、この間卯木の「川柳江戸砂子」をまとめる努力をする▼同三年（四十才）・二月三日親交のあつた卯木謄（五六）逝く。▼同四年（四一才）二月名古屋へ轉任、名古屋市東区新出來町一ノ三五。・八月さる。▼同七年（四四才）六月「川柳雑誌」に武玉川研究論講を執筆、これは秋農屋、蛭子省二両氏と共にその蘊蓄を傾けられしもので、昭和十八年十二月号まで前後十二年間続けらる（第五篇まで）なお母堂も既に永眠されしこと輪講中に「硬骨だつた母を慕はしく思う」と記されてゐる。▼同八年（四五才）二月宇AKから三太郎、雀郎、迷亭氏等と共に放送。▼同六年（四三才）一月飛島組大阪支店へ轉任、家族も移住す、大阪府豊中町櫻塚一二五九。・六月東魚氏の助力により完成した「川柳江戸砂子」（増訂版）出版部市へ轉任、仮寓——山口縣宇部市縁橋通三丁目。▼同九年（四六才）七月「一番傘」に俳風柳樽拾遺論講を執筆、これは約二ケ年間続く・九月川柳雑誌社賛助員に推薦さる。十一月関西川柳学会結成について発起人に加わる。▼同十年（四七才）一月大阪朝日ビルのおもちやの絵と句と玩具の会に賛を揮毫。三月飛島組を退社、株式会社間組大阪支店に入社。「三味線草」に柳多留四編輪講を執筆、これは昭和十七年十月（関西川柳学会報）迄前後八年間続く。▼同十一年（四八才）三月令兄ほのほ氏の新居（京都）落成、これは東魚氏の設計になるもので、この外花菱氏の旗洗荘も同氏の設計である。・八月女兒出生、これにて四男四女となる。▼同十二年（四九才）四月名古屋の第四回全國川柳家交歓大会に出席▼九月「三味線草」に柳多留二十四篇輪講を執筆、これは昭和十七年十月（関西川柳学会報）まで続く。・十二月八日幼な友達で柳友のみの作（四八才）豊中市で逝く。▼同十三年（五十才）十一月新居浜市へ單身轉任▼同十四年（五一才）八月「川柳詩社」のメンバーとして、花菱、苔蟲、阿寒、浪々子、雀郎、愛耳、青風、春雨、東魚、竹園、也奈貴氏等の名見ゆ▼同十五年（五一才）二月新居浜の工事々務所で出火、携帶の雑誌、書物を全部焼失す。八月久振りに帰阪路郎氏蛭子氏と歓談す・九月北京支店へ轉任のため單身赴任（中華民國北京内二区新平路二号間組北支支店）▼同十

鳥ケ辻川柳會
箕面吟行

八月廿日午前十時朝からの雨にもめげず、一同取急に集合ひる前土砂降りの中を谿谷の響きを楽しみながら景勝箕面の中腹にある近畿電氣通信局の山の荘に落ちつき川柳三味境に入つた。作句に酒杯に興はなか〳〵盡きなかつたが夕刻一念撮影の後山を下つた

写眞は前列右より市場沒食子、小沢史葉若林艸右、麻生路郎後列右より水谷竹荘森下愛論、尾崎方正足立春雄、吉田斜水の諸氏。

史號氏撮影

六年(五三才)十一月久振りに帰阪、年末帰任▼同十七年(五四才)戰捷を謳つた句集「川柳霹靂火」出版。▼同十八年(五五才)二月令息病氣について帰阪。・六月廿六日次男修二君(廿才永)眠、遺骨は東京に埋骨さる。十月、令息の偲び草「凡人経」出版▼同廿年(五七才)五月北京川柳会主催の川柳展に出品好評を博す。・十月二日間組支店の宿舍にて脳溢血のため永眠。▼同廿一年四月三日令兄森ほのほ氏(劇評家謠曲指南)永眠

社の黒板

▼本社の十月句会は七日(第一土曜)午後五時半から大阪市南区鰻谷仲之町(三休橋南詰東入)大宝文化会館三階で開催する。

兼題「看板」三句
同「展覽会」三句
同「孫」三句
柳話(麻生路郎師)
句評(水谷鮎美氏)

不朽洞会賞は水谷鮎美氏が二連勝になつているので興味が深いわれと思はんものは大いに挑戰されたい。

会費五〇円、初心者の來会を歓迎する。

▼川雜系句会で前もつて誌上に発表希望のむきは、句会の日時、場所、会名、幹事、兼題等明記の上、前月の五日までにお知らせを乞ふ。

▼川雜添削会入会希望者は、その規定により、作品を希望講師へ直接送附されたい。講師の住所は左の通り。

麻生路乃講師は川雜本社内、福田山雨楼講師は横浜市保土ケ谷局区内、岩崎町一〇番地
須崎豆秋講師は大阪市阿倍野局区内、旭町三丁目一四番地
水谷鮎美講師は尼崎市西口開一八一番地

▼川雜支部設置希望者は誌友五名以上連記の上、幹事から申込まれたい。

▼投句規定は厳守されたい。句稿用件との併記は事務上何れか一方が遅延することになるので、必ず別紙に認められたし。

▼誌代切れ通知の場合には出來るだけ、早く御送金を乞う。郵便局に遠い方は切手(なるべく小額)代用でも可。

▼愛読者各位の一人が一を殖やす倍加運動に御協力がお願したい。今のまゝでも、内容充実と誌代低廉で好評だが本号からの増ページで更に内容実充を徹底したい。

ビール

菊沢小松園選

ビールさへ飲まぬ藝者がえくはやり　英世
ビールなら飲めると女酔ふつもり　湖月
細君へ一杯だけはついでやり　忠美
ビールなら戴きますとためらはず　淑郎
ビールなら飲むわと女負けてあや　七面山
左遷とも氣附かず妻はビールにし　冨至
ボーナスはビールの泡となつて行き　五厘棒
お見合も成功らしいビールが出　加代
終電車後十分を生ビール　孤峰
生ビールを横目でにらむ薬瓶　智水
傷ごつたビールに多弁な我となり　安彦
ビール代丈けはさうにか持つて來る　純香
一呼吸のビールの泡が髭に附き　葉光
税金が高いとビールつぎこぼし　十九平
十五秒ビールの泡が邪魔になり　柏葉
ビールなら少しいけます許嫁　莖丈子
損をした話にビールよくはづみ　奇朗
ビール飲む機嫌(愚痴を言ひそびれ　茶々
氣の抜けたビール話の混み入つて　淵年
湯上りの風へビールの栓を抜く　陽々
ビールならいけますやうと儲ける氣　孤舟
氣のおけぬ客へビールの肌を抜く　十四郎
ビールから焼酎になり唄になり　博也
酌ぎこぼずビールの泡も新家庭　一徹郎
三味線に調子の合はぬビール瓶　卯門
ビール壜コツプにあたる音もよし　霧花
この上はビールがほしい小さい慾　雲平
居合せてビールの宴の客となり　勳
生ビールならと女も向き直り　九坡
ビヤホール飲めないやうな顔もあり　純男
昇給へ妻の無理した生ビール　楠風
ヘソクリで好きなビールを買つて呉れ　美能留
兎も角も暑さをしのぐビヤホール　五客
栓ぬきを探すあいだに釘で抜き　春雨
駅賣りにビールも揃ふありがたさ　高谷
生ビール泡は上手に殘される　草女
すだれ越し裸同士で抜くビール　茶佛
ほろ酔のビールに淡い恋の唄　粗影
惜別のビール静かに注ぎ分けて　地人
冗談にビールの泡も消えかゝり　天
ビヤホール素通り出來ぬ伸んなり　古峰

課題吟

末席へ課長ビールを注ぎに來る　翠柳
つき出しの豆を子供へ持つて去に　直郎
二本目のビール女中は氣を利かせ　如川
氣抜けしたビールのやうに酔がさめ　紫風
咽喉佛へふれてゴク〳〵生ビール　不味
うらぶれてビールの泡へ眼が据はり　夏六
赤白の自轉車もあるビヤホール　哲水
床上げの夫へビールつぎこぼし　牛歩
生ビール竹馬の友の味があり　元馬
篤農と云はれビールの値も知らず　芳泉
下戸でない証拠のやうに飲むビール　桂夢
ビヤホール男の意地が飲みつゞけ　爽信
ビールさへ飲まぬ夫と貧に慣れ　苑女
意見聞くビールは苦い味でのみ　万平
栓抜きを帶に吊して來るやとな　山雨楼
スクリーンのビールは派手な音で飲む　一葉
商談へ馳引があるビール酌ぐ　九呂平
咽喉佛ビールの泡に動かされ　月仙
ビール冷え遠來の客膝くづす　蛙声
ビール瓶下戸の家から借りて來る　正一
縺まらぬ話ビールの泡は消え　鉄兒
二杯目に味を見附けた生ビール　中山子
引き留めて酒いてビールを買ひに出し　日淵子
子の笑ふビールの泡は髭につき　光郎
日本を見直すビールの味となり　〃
〃　〃　〃

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
大阪・武田藥品工業株式會社
45錠入

いのちある句を創れ

花地物語

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社八月例會（大阪）

八月五日　午後五時半
於　大宝文化会館

いくら暑くても句三昧に入る人たちにとつては暑さも暑さでない。珍らしい顔振れとしては前山北海氏が出席された。水谷鮎美氏は「捕つた掬摸の胸にも白い羽根」（万年）其他に就て句評をされ、路郎主幹は「作句上の二つの態度」に就て熱弁をふるわれた。八月のベストテンの第一位、不朽洞賞杯は水谷鮎美氏の手に落ちた。二月に獲得した同氏は二回目の受賞であつた。（幹事）

出席者‖路郎・文蝶・豆秋・春柳・古方・北海・乃布男・愛論・竹荘・芦穂・淡舟・博也・正司・胡蝶・史葉・鮎美・没食子・小松園・都三・種美・風路・修三・貴山・万樂・亞鈍・鈍太・晴峯・野介・緣雨・鬱骨・嵐楼・恒明・三司・里十九・翠光・瓜平・梨里・葭乃

兼題「冷藏庫」　廊生路郎選

冷藏庫中見とどけて風呂に行き　愛論
裏口から妻は酒屋の冷藏庫　古方
なめくぢに見上げられて冷藏庫　胡蝶
冷藏庫トマトを冷すだけのとこ　正司
昨晩の食べさしを出す冷藏庫　豆秋
冷藏庫今日は旦那の來る日なり　恒明
冷藏庫もあつてと母は銭を褒め　鈍太
此頃のくらしに触れる冷藏庫　小松園
冷藏庫ビールは冷えたまゝ殘り　三司
冷奴の角が崩れる冷藏庫　幾三
二階借りしてでもちさい冷藏庫　没食子
冷藏庫マダムはせまい所へ立ち　種美
冷藏庫ヨソのビールに借りられる　翠光
冷藏庫へどつさり入れて夏祭り　風路
冷藏庫又々鯛が賣れ殘り　嵐楼
冷藏庫姑の嫌いなものが冷え　鬱骨
冷藏庫もうカチワリがあるはかり　芦穂
冷藏庫の中まで病人氣を使い　葉光
冷藏庫主婦のやりくり知つており　十九平
お隣の冷藏庫まで借りる仲　同
妻の夢の一つに電氣冷藏庫　正司
冷藏庫欲しい〳〵で夏が過ぎ　亞鈍

兼題「子守」　市場没冥子選

捨てられた妻へ未練な子守唄　山嵐楼
毛脛だし子守をしてる妻の里　亞鈍
親も子もうと〳〵してる子守唄　葉光
飛行塔子守大きく乘つてゐる　芦穂
紙芝居一番後に子守がゐ　十九平
のゞ自慢子守は前の方で聞き　淵年
座蒲團を抱いて赤城の子守唄　種美
兒と子守同じ柄の簡單着　里十九
子守ふと亡母の面影雲に追う　亞鈍
逆境の膝とは知らず子は抱かれ　三司
子守して子の云ふまゝの忙しさ　翠光
ブギウギの世に子守なぐさめられる　迷宮
寢かす子へ子守の唄は派手過ぎる　文蝶
子の熱に子守冷たい眼で視られ　同
同棲は子守もしたり飯も炊き　風路
私生兒といふ子をあやす淡つたい　小松園
五人の子遊ばす海の小半日　万樂
紫陽花が好きな子守の恋ごゝろ　鮎美
腹が減る〳〵田舎から來た子守　豆秋
優良兒子守の小さい手にあまり　鉄兒
肩書はあれど子供は泣きやまず　小松園
蟬があんまり鳴くのでおら子守が嫌になつた　晴峯
老先を子守に託す日が続き　胡蝶
子宝は幼し夫妻もてあまし　没食子

兼題「夏痩」　戸田古方選

夏痩へ裸になれのマア脱げの　三司
夏痩を氣にして父の柔葉服　里十九
洗濯で夏ひつそりと痩せてゐる　幾三
夏痩は默つて朝食の箸をとり　迷宮
水落ちえ灸を据へてる痩た夏　文蝶
借りもののように夏痩身に合はず　同
プロンデーに似る夏痩を嬉しがり　鮎美
添ひとげた人に夏やせ咎められ　正司
夏痩の笑窪は皺のようになり　淵年
失業のまま夏痩をしてしまい　十九平
夏痩もせずにおでこの天花粉　鬱骨
聞きなれた咳ばらい恩師も夏痩か　晴峯
夏やせが支へきれない子の重み　茶々
夏痩がうれしい妻と御堂筋　鬱骨
貫々に去年夏痩したまんま　嵐楼
夏痩に睨らまれてゐる八幡卷　修三
夏痩を氣づかふ母と湯につかり　梨里
夫婦して子の夏痩せを氣にしてる　季餐
夏痩の汗は一人前にかき　万樂
夏痩へ糊ギゴチない貸浴衣　修三
名ばかりの夏痩文学書を開き　野介
夏やせの頬だかまへた恋ごゝろ　博也
夏痩へ蟷螂がきて逆ひぬ　鮎美
夏痩せの古書一册が読み切れず　同
鰻まで夏痩してる土用丑　古方

席題「かぶりつき」永田里十九選

天外のほんとの笑ひかぶりつき　鮎美
かぶりつき先代のくせ知つてゐる　晴峯
成程と思ふ声ありかぶりつき　文蝶
惡友に肩たたかれたかぶりつき　豆秋
幕間の舞台をのぞくかぶりつき　種美
緊張をした顔でいるかぶりつき　豆秋
プレミヤが付くかぶりつきの券を買い　史葉
熱演の汗を見てゐるかぶりつき　春柳
かぶりつき親孝行の連れを見る　貴山
かぶりつき通しで見てる芝居好き　竹荘
隣豎がにゆつと出てくるかぶりつき　春柳
立廻りそれそこ〳〵とかぶりつき　鈍太
かぶりつき水谷八重子の皺が見え　豆秋
名優の科白がもれるかぶりつき　鮎美
口あけて居ると氣付かぬかぶりつき　修三
就職の当なく今日もかぶりつき　正司
復讐へ力借したいかぶりつき　芦穂
かぶりつき汗拭く囃方も見え　万樂
眼の惡るい母へ空いてるかぶりつき　小松園
かぶり付きいつもの男今日もいる　里十九

席題「がらくた」　菊沢小松園選

がらくたの夢ぶちあける玩具箱　幾三
がらくたにつもれぬ遠趣味に生き　胡蝶
がらくたをうつかりほめて云ひのがれ　春柳
がらくたの中から拾う人の子よ　亞鈍
趣味うれしがらくたのなかはひまはり　貴山
がらくたへ活神軍なぞと施錠する　芦穂
がらくたを又しまい込む大掃除　修三
共に苦労した仲がらくた捨てられず　志乃布
がらくたを見て戰災の愚痴を出し　種美
先夫の好みがらくたながらすて切れず　晴峯
持つ人が持ちがらくたの活きてゐる　恒明
がらくたかくす風呂敷も破れていず　古方
がらくたの一つ一つに物語り　正司
がらくたの中は金無垢埋くまり　小松園

句碑建設記念川柳會

八月十二十三日
於　三本松　翠光居
良緣・坂・サンダル・鉢植・資本・出張・読書

良緣を逃がしミシンを踏んでゐる　尋四
良緣を不思議な緣とかしこまり　梅里
家柄も思想も合つて許嫁　香林
良緣が大社の宿で打ちとける　八歩
良緣の日取りへパーマかけにゆく　亞鈍
天理教みな良緣にしてしまい　山雨楼
娘の意志を曲げ良緣にしてしまい　鉄兒
仲人はみな良緣にしてしまい　七面山
吉日を選んで恩師の嬢が來る　野介
良緣を賺つてアパートに共稼ぎ　北海
まあ鍬を置けと良緣聞かされる　史葉
良緣を鼻の低さが取り逃し　生々庵
良緣と母親のもう乘り氣なり　無鬼
金のあることが良緣のやうに言はれ　栞
親の言ふまゝがよかつた緣につり　翠光
良緣もうこり〳〵の未亡人　豆秋
良緣は東の間家庭裁判所　方正
良緣も耳にかさない二男坊　里十九
良緣と父はだまつてうなづけり　正司
良緣のチト両親が達者すぎ　斉花

御降嫁へ元男爵家砂利を敷き　日溯子
良縁さ僕も彼女も同じ趣味　竹荘
相談もせず良縁にしてしまひ　古方
良縁と言ふたら娘に叱られた　馥乃
良縁をことわる訳を知る妹　瓜平
良縁がいろ〳〵とある相談所　十九平
覚関係ばれて良縁駄目になり　無鬼
良縁といふがスラ〳〵〳〵と出来　無聖
膝詰めの母良縁と言いつゞけ　豆秋
良縁へバスケットだけ提げてくる　栞
良縁かどうか嫁く身がいつも知り　翠光
良縁へ母はせはしく縫される　路郎
良縁に夢描くこと〳〵　同
貧しさが云えず良縁とりにがし　文蝶
上り坂牛を労はる程に積み　十九平
これしきの坂に必死のバス喘ぎ　鮎美
家出する坂に涼しい月が出る　栞
グラ〳〵坂のまゝの湯の街時代めき　豆秋
みな默り込んでしまつた登り坂　斉花
新開屋さえ来てくれぬ坂に住み　小松園
登り坂生きねばならぬ荷を背負ひ　豆秋
靴下に砂がはいつた下り坂　由雨楼
坂道で男の短氣さがわかり　七面山
暮れ近き坂へペタルのきしむ音　鋭々
奥の院坂の下から拝んどき　斉花
お隣へ行くにも坂のある故郷　白香
叱りつゝ子を歩かせる上り坂　日溯子
師の句碑へ坂の疲れはもう忘れ　翠光
又しても坂サンダルがわやになり　鉄兒
サンダルの素足日焼のあとを見せ　無鬼
サンダルへ爪の聊かのび過ぎて　八歩
サンダルへブレンソーダの泡もよし　正司
サンダルを履くに爪まで赤う染め　梅里
サンダルの先つ窄き初め宝塚　史葉
先生は泳がぬサンダルはいたま　山雨楼
サンダルで来て細君の買い上手　七面山
サンダルと列び氣になる破れ靴　尋四
サンダルの歩調が合つた腕を組み　瓜平
逢引のサンダルへ蚊の容赦なく　竹荘
サンダルが外輪に歩く御堂筋　晴峯
サンダルの踵に若さ躍つてる　生々庵
サンダルにはみ出て黒い爪が伸び　翻骨

サンダルに歌唇えがく足がすけ　同
サンダルへ青松白砂未だつゞき　沒眞子
サンダルを穿いて蓮葉な日もき、　同
測員車サンダル容赦なく踏れ　十九平
女工さんサンダル穿いて帰省する　同
サンダルはあまり走れぬ様に出来　竹荘
サンダルを穿いて故郷の畔を踏み　無鬼
アパートの隅へサンダル脱ぎすてる　亜鈍
サンダルで露路の溝板飛びこえる　芦穂
義湯の眞ひるへサンダル一つぬぎ　栞
サンダルで花火に似たる恋をする　八歩
サンダルの素足を蟻にかみつかれ　豆秋
辻占はよし鉢植の影に佇つ　芦穂
鉢植を屋根一杯の二階借り　十九平
立秋だ鉢植にトマトとまつてる　瓜平
鉢植へ残暑きびしく水をやり　史葉
鉢植になる宿命の枝をもち　翠光
御自慢の鉢植愛犬に蹴飛ばされ　北海
陽の当る方へ鉢植向きを替え　貴山
駒下駄へ鉢の枯葉が二三枚　愛論
鉢植にザクロ実のらせ里の父　野介
鉢植は玉子の殻で欺される　梅里
鉢植の趣味貧しさを忘れさせ　文蝶
鉢植の松前にして祝詞読む　竹荘
明日咲く鉢の蕾へ水をやり　日溯子
鉢植の花咲かぬまゝ子沢山　梅里
鉢植へ向いたにごうの疲れよう　鮎美
パトロンはさなたカフエー閉めもせず　翠光
未亡人金主を開けば笑ふだけ　正司
まゝごとの様な資本でよく儲け　竹青
資本まで出して頂き嫁もらひ　無聖
資本家の目にまだ値切る余地があり　八歩
資本さえあれば重い荷をかつぎ　竹荘
いゝ餘で借りた資本を飲み潰し　方正
道楽にしては資本の多すぎる　愛論
資本論どうのこうのとやせ給ひ　恒明
資本家をおどらす程の美しさ　馥乃
開店の借りた資本と見えぬなり　栞
資本論とに角棚に積んでおき　無鬼
家も建て資本も入れて手を切られ　野介
資本論おや〳〵君は酔つてるれ　梅里
靴みがき明日の資本の一包み　翻骨
もうこの子鏡に趣味を持ち初め　生々庵
竹青

手鏡をそつとのぞいて茶を運び　柳慶
青春を鏡の前に未だ坐り　沒食子
娘の荷物せめて鏡を大きくし　斉花
灯を消さぬパックミラーに照れている　無聖
バラックの中でも赤い鏡掛　栞
揶揄へば鏡の中の眸が睨み　梅里
嬉しい日何度もめくる鏡かけ　竹荘
惚れ〳〵と鏡に自信ある肢態　正司
淋しい日鏡の向をかへて見る　八歩
唇に来てから鏡ひまが入り　翠光
ストリップショーは出張先で見る　豆秋
宮島も見ず出張の汽車の窓　古方
出張に邪魔な土産をことずかり　馥乃
盆近く出張故郷の方へとり　栞
出張の或る夜の空に銀河見る　正司
出張から帰れば子供カバン開け　柳慶
出張は私用コースも中に入れ　無聖
出張をした筈と会ふ戎橋　梅里
出張の景に矢立のほしいとこ　愛論
賃上げへ社長出張したと云ふ　方正
出張のこんな所で旧友と会ひ　無鬼
出張の途中下車して妻の故郷　鮎美
出張の鞄は重いものにされ　小松園
御無沙汰の顔出張で訪づれる　日溯子
出張は訛の多い國につき　栞
答案へ読書が趣味と書いて置き　芦穂
通勤の寸暇もリーダー読み耽り　北海
ドストエフスキー全書さらへ〳〵読む　亜鈍
読書する暇はないはと畫寝もし　無鬼
読書する氣分も湧いて秋の立ち　竹青
読書する横顔たのもしくみつめ　翠光
チヤタレー夫人を読んでゐる社長室　豆秋
ハンモック読書のまゝで寝てしまい　晴峯
読書して腹のふくるゝ日がつゞき　生々庵
乗物の中が読書の時間です　貴山
追放の晴耕雨読つゞくなり　日溯子
読書好き妻にスキッチたのされる　八歩
乏しさに耐えても読書だけつゞけ　白香
おとなしい読書眠つているらしい　愛論
万巻に通じ案外うぶな恋　方正

雑東京支部句會（東京都）

川

七月三十日　於 島野ビル
川村好郎報

素顔・夏やせ・ニューフェイス・雷・手紙・夏休み

一夜妻何ときたない素顔なり　稲水
この素顔チンドン屋さは見えません　東夢
素顔にも名妓としての品を見せ　好郎
素顔なんて見るんじやないわとつねられた　高志
子を産んで妻は素顔を遠慮せず　好郎
夏やせに効くうなぎには縁遠し　ひろし
夏やせと思へぬ父が眼に痛く　守夫
夏やせは貴方がしたとうらまれる　東夢
夏やせと嫁心を打ちあけず　白星
ニューフェイスそれから金のかゝることと　守夫
ニューフェイス給仕の横に浅くかけ　白星
雷が遠くへ落ちて西瓜割る　同
かみなりが止んで抱かれた眼のやり場　同
雷のおかげで意見終りけり　好郎
御許にまゐる手紙の不足税　白星
手紙ではまだ〳〵意地をはるつもり　東夢
つまり金送れの意味になる手紙　白星
先生はいゝなと思ふ八九月　好郎
ボーナスもないのに子供夏休み　同
宿題を三日で上げて夏休み　白星

川雑布哇支部

七月二十三日　於 商工会館

ウイロー社句會（ハワイ）

負惜み・遅刻

負惜しみ言ふので人柄察しられ　煙波
あの時はこうであつたと負け惜み　長洲
人の恋あゝのこうのと嫁き遅れ　魔花麗

版写謄田阪

二五町田芝区北市阪大

株式会社 阪田商会

電話 六三五一 福島 一番 九九五五 四番

その罪を半分妻に負はせとき　同
負惜しみ強くは言へど養子なり　草一郎
別れます金や名誉にや嫁しません　同
賭けた恭に負けて当りの荒いこと　快夢起
然しれそれでもなどゝ負惜しみ　同
負惜しみ言つても駿に逆らへず　亭駒
落選し資金不足とうそぶける　純香
台湾の隅で大きく見得をきり　拜山
負けたとは言はず苦情は酒の上　河舟
負け惜しみさらりと捨て、土に生く　曉舟
失策でないとボースの負惜み　花符累
戦争に負けて平和に勝ちました　大城生
ブツ〳〵と負惜み言つて帰り行く　法寸
女の子窓から顔出し負け惜しみ　銀水
一対二十の敵と米兵退却し　如波羅閣
貧乏も死も神様のせいにする　紅宿
時の運などと落伍者負惜み　芳雨
遅刻したお蔭で寄附を免れた　純香
君もかと遅刻いさゝか氣をよくし　快夢起
遅刻なごさせまい妻の台所　魔花麗

角一ゴムK・K
絣殊紙器K・K　川柳對抗試會（大阪市）

七月廿三日　於阿倍王子神社

人魚・鐘・悪魔・共鳴・べんちやら
ロレライ人魚は空を見る許り　夏六
看板の人魚を浴衣がけで纏る　亞鈍
人魚追う男の夏の海　一路
バーの隅人魚の頌の古ぼけて　晴峰
煩悩を捨てに梵鐘聞きに来た　夏六
鐘一つマイクの前をムツと退き　晴峰
除夜の鐘御破算ですと鳴渡り　亞仁
過去未来すべてを越えて鐘の音　一草
雲の波わけて地上の鐘が鳴り　野介
印象はニコライの鐘ときに言ひ　種美
梵鐘へふつと佛の眠むくなり　闘骨
鐘の音の湖心を越えてとどく村　一草
のど自慢アプレゲールの鐘が鳴る　亞鈍
紙芝居大鼓の音で悪魔退し　一草
耳もとへぼそ〳〵こそ悪魔めき　野介
悪魔ふと尻尾のないを淋しがり　一路
俺は悪魔だ自嘲がうふふと笑つてる　亞鈍
愛すればこそ悪魔と罵られても平氣　亞鈍
紅つけて小さき悪魔寄つてくる　一草
も一つの悪魔の如き吾を知り　晴峰
恋をした悪魔妖術ふと忘れ　闘骨
大胆になれよと悪魔ささやきぬ　豆秋
若人に共鳴されて自信つき　一路
共鳴をさせてそれから寄附のこと　一草
おごられる方がやたらに共鳴し　亞鈍
一つぱしは共鳴をする苦労人　種美
共鳴してよと女の目が笑つてる　亞仁
飲むほどに共鳴したを悔いて来る　夏六
國禁の書に共鳴の若さよし　野介
共鳴は西瓜の種を吐きながら　闘骨
不良兒に共鳴しつゝ論してる　鮎美
共鳴の雷雨のなかの生ビール　晴峰
べんちやらを言つて小兒科よくはやり　亞仁
べんちやらの電話はうわの空できき　豆秋
べんちやらが難波駅まで送つて来　同
べんちやらも言えゃ課長にもなれゃ　夏六
べんちやらを万更でもない社長なり　同
べんちやらも時にさつては眞理なり　一草
べんちやらをする悲しさを知りつゝも　同
べんちやらのつもりでないとプレゼント　種美
そないべんちやらせねかてやるがなさ犬に言ひ　同
商人のべんちやらもみ手から生れ　迷宮
べんちやらは明日の天氣を言うて会に　同
べんちやらをフン〳〵聞いていい暮し　同
見えすいたべんちやら軽く横むかれ　晴峰
べんちやらえ先生やつぱり点をつけ　同
べんちやらをしていやがられいやがられ　同
ベンチヤラにうつかり乗つておごるのみ　亞鈍
ベンチヤラで明日の生命が生きるのみ　同
べんちやらを言ふて叱られつまづき　鮎美
べんちやらをどこまでも見て御座る　同
べんちやらの代りにお辞儀許りする　夏六
べんちやらの目にこの家も金詰り　迷宮
べんちやらはおいとけ俺は酒は呑む　鮎美

川雑　出雲支部句會（出雲市）

七月四日　於廿覚の店　尼　緑之助報

指・日傘・タオル

末つ子の指の力もたのしい夜　壯
触れざるが如きに早しキイの指　まさる
指先に視線流して舞い上手　独仙
一つづつ日傘をのせて貸ボート　萩枝
此処という合図の日傘高くあげ　草紙
日傘くる〳〵もういらつしやる頃だのに　独仙
お屋敷の廣さをほめて蒸しタオル　緑之助

川雑　大牟田支部句會（大牟田市）

七月　於三染保安課

水・一割・放出
打ち水へ走つて逃げたハイヒール　抱邊
生水は恐いですよと衛生課　扇波
山登り水が物いう坂になり　充
旅の水氣使う母の魔法ビン　青粒子
一割を貯蓄にするも子沢山　抱邊
一割は本当らしいホラを吹き　一葉
金詰り一割引の肚をきめ　青粒子
放出の洋装にたかる娘は二十　充
放出衣のこんなところに穴があり　常天

川雑　岡山支部句會（岡山縣）

七月廿二日　於弘済会ハウス　藤本測年報

内氣・君頭を冷し給へ・心遣い・
肉体・机上論・サイダー・泣き
落し・島
母さんの通訳が要る内氣な子　聰夢
妹を歯がゆがらしている内氣　大甲帽
初恋の距離のまんまに嫁つた人　四案
座談会内氣な方へつめよせる　久米雄
捨てられているさも知らず貰いでる　鉄兒
競輪に病みつき山も畑も賣り　大甲帽
測員の足を踏んだとわめきたて　測年
損をする競馬へ五里のペタル踏み　正一
酔ひ加減山の手線を二度廻り　聰夢
小金持もう代議士になりたがり　測年
君頭を冷し給へ僕は飯を食う　風來子
御婦人の来訪録書は座を外し　十九平
湯上りへ妻は團扇を持つて待ち　四案
特種を逃した部下の背をなでる　測年
商品にする肉体へ安化粧　大甲帽
向い風肉体の線画き出し　茶々
机上論株は儲るものと決め　九坡
机上論廻轉椅子がとりまかれ　聰夢
ダンサーの恋サイダーの泡に似て　娯句樂
結尚はサイダーにする子供連れ　久米雄
次の手も用意してゐる泣き落し　通常
しく〳〵と泣かれ婚約してしまひ　測年
かつぎ屋のこんな島から運び出し　鉄兒
絵のような島近よれば岩と松　紫郎
あきらめて佛にすがる小豆島巡り　一貫
島の娘へ都の風が吹くバーマ　忠美
夢の島などと宣傳扱け目なし　九坡

川雑　美作支部句會（岡山縣）

大家無患子氏祝賀句会
六月二日　於無患子居

月・水・木・金
逢引へアラ面白や月が出た　朗笑
柿の木はなるものにて税を決め　富三
罰金刑より体刑に願います　惠舟
金詰り妻の意見も聞いて見る　久米女
返金に来たのに中からどなられる　夢成
金よりは情のほしい苦労する　忍
持参金女中代りも覚悟して　一貫
金策の盡きた背中へ日が落ちる　久米女
金で買う女に情あり過ぎる　七面山

雑川

呉支部句會（呉市）

七月八日　於林野甦光居

蚊帳・梅雨・行水・かもめ・消防士

蚊帳の隅たらふく吸つた二三匹　魚幸
蚊帳のすそつとキャンデーを入れて呉れとけ合わぬ心のまゝの蚊帳に入り　紅兒
蚊帳吊つて寝るには早い碁を囲み　史球
轉落の蚊帳ためらわず帶を解く　正一
枕蚊帳覗いて勘めの服を脱ぎ　秀峰
独者ごろりと蚊帳は吊りながし　甦光
梅雨の雨降られば淋し降れば憂し　あざみ
傘一本返らぬまゝに梅雨が明け　正一
海水着店に並んで梅雨が明け　枝葉
行水に肴の用意出來た頃　愁洞
やせた背を妻は氣兼をして流し　哲也
行水の差し湯に膝のおき所　彩峰
行水を一人殘して飯にする　甦光
行水へぶらりへちまは無表情　史球
足あとをつけ〳〵行水上つて來　紅兒
此の辺へかもめがほしいクレオン画　良平
このかもめ瀬戸の風情の中にあり　史浪
サイレンに早や制服の夫となり　史球
消防士映画半ばで馳けつける　紅兒
火見台三十年の勘を持ち　高馬

雑川

岡山縣廳支部句會（岡山）

七月八日　於縣廳内世話課服部十九平報

田植・顔・デパート・主張・魅力・飛ぶ

田植して早や供出を案じおり　十九平
ブギも出るブルースも出る田植歌　紫郎
田植すりやもう秘金が待つており　中山子
借金も恋も忘れて田植をし　七面山
唄ふのが好きで田植の列に入り　九坡
田植には間に合うように嫁貰い　茶々
泳ぐように植えているのが養子です　風來子
食卓にビール見つけた顔の色　茶々
写眞ではなかつた顔の黒子なり　四案
顔だけは歌笑に似ても食へませぬ　同
我が夫に似た子が生れほつとする　案山子
金のない顔へ投資呼びかける　聰夢
デパートのマークはあるが特價品　十九平
デパートの買物派手な音で着き　九坡
デパートの金魚もやはり同じ色　中山子
デパートへ今日も虚榮の足を向け　四案
デパートで椅子を見つけた待ち呆け　風來子
オールドミス女檀を主張して倦まず　十九平
一言で通る主張を言いしぶり　風來子
主義主張なくて役所の隅に生き　九坡
下つ端の主張は聽かれ置くのなり　同
ひたむきな藝の魅力が死を招き　九六
倦怠期曾つての魅力鼻につき　吉備平
素顔にも魅力はつきり恋と知り　聰夢
飛入の弁士共産党めいて　同
絶景の絵葉書雲が一つ飛び　九坡
飛んで跳ねてまなぜの上に恋をする　風來子
高飛びの女矢張りついて行き　九坡
飛びついて女五年の苦労泣く　七面山

雑川

愛知支部句會（愛知縣）

六月七日　於久平居

津川竹坊報

夏まつり・朝顔

姉は服妹は着物夏まつり　北雷
その当座朝顔咲かず未亡人　磊兒
朝顔の萎む頃起き職はなし　久平
おまつりで馴染んだ藝者婆となる　雨蓮
朝顔は隣屋敷へ向いて咲き　竹坊
朝顔は種の見本の絵にも似ず　同

七月七日　於久平居

津川竹坊報

ビール・螢

引揚げの父もまじつて螢狩　北雷
七階に灯を見下して生ビール　久平
大ジョッキ一つの内は万事無事　竹坊

雑川

岡大支部句會（岡山縣）

八月五日　於学生食堂三階

大森風來子報

橋・海水着

吊橋をゆすつて女寄せつけず　風來子
端境期今日も私服が橋へ停ち　九坡
女中にも水着を着せて供をさし　壽子
海水着脱げば乳房をせがまれる　北星
正札のついた水着で泳ぎに出　満年

日の丸句會（鳥取市）

七月七日　於工場事務所

河村日満子報

團扇・蚊帳・氷・大臣・本塁打

サービスに團扇をそへる頃となり　雲樹
愛情の團扇の風は背中から　吾柳
枕蚊帳直し直して三人目　なぎさ
蚊帳はづしながら女房の起す声　遊星
蚊帳しばし吊らず雑誌読み耽り　日満子
警邏ふと氷屋へ寄る夏の午後　宵待草
氷屋へ一人お医者へ一人ゆき　日満子
氷割る音に感謝の熱いもの　壽明
大臣になる氣の子供よく眠むる　至高
大臣の名前を知らぬまんま生き　遊星
大臣の失言訂正出來ず辞め　芳道
ホームラン打つよなポーズ三振し　星流
野手が皆球を見送る本塁打　秋男
サイレンへまだ走つてる本塁打　日満子
へぼ野球あの線からかホームラン　壽明
キャンデーを噛んだとたんに本塁打　なぎさ
ホームラン打者敬遠のフォアボール　芳道

日の丸作句練習会

七月十一日　於日の丸鳥取工場事務所

約束・接吻

無効とも知らず約束手形受け　秋男
約束をしてから子供注射する　至高
またせたと二三歩彼女すねて見せ　卜天
店先で約束だよと子が迫り　壽明
簡單に引受けられて不安がり　芳道
お約束逝り借金取りがきた　日満子
投げキッス敵もさるもの返して來　芳道
初恋はキッスだけよと念を押し　壽明
キッスぐらひしてゐるように言ひふらし　日満子
許可なしの接吻平手打ちを食ひ　同
いや〳〵言ひ乍ら待つ口づけか　義雄

翻骨・鮎美対座吟（大阪）

七月九日　於翻骨店

風鈴のお墓が見える窓で鳴り　鮎美
ビールに南京豆風鈴の鳴り止まず　翻骨

春柳居偶会

八月廿六日　於春柳居

郷愁

捨てゝ來たはづの故郷を忘れ兼ね　正司
郷愁へ雲の流れの早いこと　恒明
山の灯は恋し故郷は夕焼ける　春柳
汽車の汽笛に一ぺん帰えろうかと思ひ　紫郎
家出の娘母が泣いてる夢をみた　同
郷愁のウオツカなどを呑みたひ　豆秋
郷愁へ案山子は弓をひいたまゝ　春柳
中学の桐の花こそなつかしや　豆秋

母袋未知庵著
川柳信濃國
信濃へあこがれを持つ人は多いが、ホントの信濃を知つてる人は尠ない。先づ本書によつて江戸文学から、信濃を探れ！B6 300頁 三五〇円 〒三八〇円
發行所　しなの川柳社
松本市大名町七一

編輯室にて

▼ジエーン颱風の襲來について各地の皆さんから早速お見舞下さつたことをありがたくお礼申上げる。弊社は屋根瓦が多數に飛散、物干台が庭先に落下して潰滅、ガラスが破損、高塀がアバラ骨を露出倒壞一歩手前と云う程度であつたが、附近には家屋の全壞や高塀の將棋倒しや、電柱が屋上に倒れトランスが屋根をブチ抜くと云う惨狀に比べれば被害は軽微の部に属すると云えるでせう。しかし一時水道が止まり、瓦斯がとまり、電話が不通となり、電燈が數日間点かなかつた上に、次いでキジヤ颱風が襲來すると云うので夜の不安は相当なものであつた。多くの柳友の中には高潮のため床上浸水の難に遇はれた人たちもあつたが、弊社は大阪としての高地地域だけに水の難はまぬがれることが出來たのは不幸中の幸であつた。同じ住吉区も低地部は床に達する浸水があつた。まだ被害地川柳人の消息の殆んどが判明しないのでただ〳〵無事を祈るばかりである。▼本号の表紙は柴谷宰二郎画伯を煩はした▼本号に発表するための座談会が企劃されていたが、三日のジエーン颱風当日の夕べに本社に集合の予定だつたので座談会どころでなく丸潰ぶれとなつてしまつた。諒とされたい▼このドサクサの中で一つの椿事が生じた。それは課題吟「聖書」の紛失事件である。選者高鷲亜鈍氏は句稿入手後、電車中に於て革鞄と共に紛失（或は盗難？）されたので、大いに責任を感じられ極力探索されたが遂に発見するに至らず、投句家諸氏に対して長文の陳謝狀を認め本社へ寄せられたが、これを掲載して見たところで、句稿が戻る訳でもなく、本社としても施すに策がなく、選者と共に投句家諸氏の御寛恕を只管お願いする次第である。お手許に句稿の写しを保存されている方々は重れて御投句下されば選者にお送りして同氏の責任を幾分か軽減して貰うこととしたい。期限は十一月末日までとする▼本誌は本号から、四頁増ページとした。これは本誌遂号好評の具体化であつて、寄稿家諸氏並びに愛読者諸賢が、本誌御支援のたまものに外ならないと思う。あつく御礼申上げると共に一層御支援と御べんたつをお願いする。（路）

―動　靜―

▼本社川柳忌句会は二日午後五時半から大宝文化会館三階で開催された▼大阪遺信病院川柳会は九月九日午後二時から図書館で開催▼西日本川柳大会並びに路郎句碑除幕式が九月十七日に弓削川柳社主催で挙行され不朽洞会から多数の出席があつた▼南海鉄道川柳会は九月廿二日午後五時半から南海高等学校階上で開催▼南区医師会川柳同好会は九月廿六日午後七時から辛口病院三階で開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雑岡山支部句会は八月十九日に弘済会ハウスで開催された▼川雑備前支部句会は八月廿六日久米雄居に於て娯句樂、苑女歓迎句会を兼ねて開催▼川雑岡大支部九月例会が二日、学生食堂三階で開催された▼句集「一年生」が八月二十八日に南区医師会川柳同好会から発行された木村無名林氏編▼荒川不退氏（大阪市）は八月九日に還暦の誕生を迎えられ「ネクタイの赤にいさかか怯怩たり」の句を寄せられた▼村上角堂氏は大阪府豊能郡箕面局区内、牧落一六四へ移轉▼河楊梵鐘氏（貝塚市）は千原庸司が亡くなられたので千石荘川柳会を引継がれることとなり、同川柳会の「体温」は庸司氏追悼号を出される由▼篠山籌彦氏（大阪市阿倍野区丸山通）の長女茂美さんが八月廿九日に永眠され、謹悼▼杉原大研子氏（本名寄　元不朽洞会員）は阪大医学部附属病院に入院中の処薬石效なく八月廿一日逝去された哀悼に堪えない▼牧梨花村氏は東京都港区麻布三河台町十三、市村隆吉様方へ移られた▼高田茶撫郎氏は金沢市大工町富沢方へ移轉。

募集

課題吟募集

カメラ（十句）浪玲之介選（十月廿五日締切）

洋館（十句）寺井鋭々選（十一月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）（廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出來る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第五卷　第十号
一冊　金三〇円（送料三円）
（禁轉載）
半ケ年概算　金一九八円
一ケ年概算　金三九六円
昭和廿五年九月廿五日印刷
昭和廿五年十月一日発行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇

Made in Occupied Japan

風・水害御見舞

ジエーン颱風の御被害は如何ですか。被害地の愛読者諸賢並びに不朽洞会員諸君に対し弊社・弊会一同心から御見舞申上げます。

謝風水害御見舞

この度のジエーン颱風については早速御丁重なお見舞をたまわりありがたく深謝申上げます。弊社・弊会共に小被害程度でありましたから御放念下さい。

川柳雑誌社・川柳不朽洞會

風趣豊かな
お好み食堂
おなじみの「食道樂街」七階
◇てんぷら◇とんかつ
◇中華料理◇お酒
◇ビール◇フルーツ
（外食券食堂）
甘藷茶屋「甘樂」開設
松坂屋
大阪・日本橋

最短時間で結ぶ
大阪・名古屋
3時間特急
毎日3往復
座席指定完備
特急料金　¥60
上本町発　7.40　13.40　16.40
名古屋発　8.00　13.00　17.00
近畿日本鉄道